
バク（休止中）

哲也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バク（休止中）

【Zマーク】

Z3338D

【作者名】

哲也

【あらすじ】

可愛いけれど可愛くない妹の朔。その朔の見る悪夢を喰いついてノートに刻んでいく姉の麻子。朔の見る悪夢が最悪の現実と麻子は気付いて・・・・

1・夢覗い（前書き）

見ていてくれた皆様、どうもすいません。これまでのは間違つて消してしまいました（涙）。頑張つて書き直します・・・・・。

1・夢喰い

私には七つ離れた妹がいる。朔と言うのだがこれが可愛くない。三白眼の目は何時も私を睨みつけているようで、時々なんでもないのに引っ叩きたくなる衝動に駆られる時がある。こいつやって言うとなんて酷い姉なんだろうと思われるだろうが、いやいや、これが本当に可愛くない妹なのだ。人が折角真心込めて作った食事にケチを付けるのは日常茶飯事で、私が唯一楽しみにしている家事の後のテレビドラマにまで「くだらない」と一言の下に斬り捨て自分の部屋に戻っていく。九歳のお前に大人の色恋沙汰の一体何が分かるのだと言いたいのだが、余りに威風堂々とした後姿に私は何も言えなくなってしまう。

真っ白のふわふわのホイップクリームみたいな頬っぺたに、苺マシュマロみたいな柔らかい唇。栗色の髪はパーーマも中ててないのに毛先が内側へくるくる丸まっている。

何の間違いか我が家に生まれてしまった可愛いけれど可愛くないお姫様は、時々とても可愛くなる。そしてそんな時は決まって私は訳の分からぬものに襲われるのだった。

高校一年生ともなると先のことが見えてくる。

私は高校を選んだ時のように大した動機もなく大学を選び、やつぱり同じように会社に就職して、多分一人の男性を選び結婚するんだろう。そしてさそやかで平凡だけど幸せな一生を終えて土に返るのだ。

そう言つた未来への願望、それと反対のベクトルにあるそこはかとない不安。それに良く似たものが私を襲うのだ。

それが予兆なのだと氣付いたのはつい最近の事で、そんな時は決まって朔が私の部屋に尋ねてきて、あの小憎らしい態度が嘘のよう震える子犬みたいな目で私を見つめ、「お姉ちゃん一緒に寝ていい?」

そう尋ねるのだった。私もそんな夜はいつも一人で眠るにはどうにも寂しく、ベッドに朔を招き入れ二人抱き合って眠るのだ。でもそれは精々一時間か三時間位のもので、だらだらと脂汗を搔きながら朔は必ずうめき声を上げて苦しみだす。私がそれに気付いて揺さぶり起こすと、

「また見た」

朔は震えて泣きながらうつ言い、訥々と夢の内容を話し続けるのだった。

夜が白む頃に話は終えて、朔は何事も無かったようにふらりと私の部屋を出て行き自分の部屋へと戻っていく。私は眠い目を擦りながら学習机に座り、一冊のノートを棚から取り出して朔の見た夢を書き綴つていく。

ペンを走らせながら何時も思つのですが、私は案外この作業を気に入っているんじゃないだろうか。気付くと何時も鼻歌を歌つているのだから。

もつとも、朔の見る荒唐無稽な夢が羨ましいとは思はないが・・・

寝不足の目を擦りながら味噌汁を作っていたらお湯を足さないと飲めない代物が出来てしまった。何を言われるか分かつたもんじゃないと思っていたのだが、朔は一睨みしただけで何も言わなかつた。今朝の今朝だから少し恥ずかしいのかもしれない。もっとも帰つてきたら何時もの朔なんだけど。

「ねえ、朔」

「なんだ」

まだ味噌汁が濃かつたと見える。顰め面して朔はポットに小さな手を伸ばした。薄味が好みだからなあ、朔は。

「たまにはパンが食べたいなつて思わない?」

「日本人が白米食べないでどうするんだ」

にべもなく断られた。食べたいなあ、焼きたてパンにたつぷりマーマレードを塗つた朝ごはん・・・・・。

そんな風に何時の間にか私達は大した会話もしなくなつて、黙々と朝食を終えるようになった。朔は洗面所で歯を磨くと自分の部屋へ身支度を整えに舞い戻り、私は時計を気にしながら洗い物を片付ける。そういうしている内に朔の登校時間がやつて来て、二階から部屋の戸を開める静かな音が響く。私は慌てて手拭い、小走りに階段へ向かう。まるで私は朔の面倒を一手に引き受けた逸事のようである。

足元を確かめながら朔がゆっくりと階段を降りてくる。早生まれもあつてか、朔は同年代の子たちよりずっと小さい。我ながらまったく姉バカだと思うのだが、もしかして朔はずっと小さいままなのではないのかと心配してしまう。出来ることなら私の無駄に高い身長を分けてあげたいと、インターネットでそんな外科医はないかと真剣に探した私は、やっぱり真性の馬鹿者に違いない。

しかし

白の半そで綿シャツに黒の釣りスカートが余りに朔に似合わない。キャラメル色のランドセルがまた可愛らしいだけにがっかりしてしまつ。私もかつて着た学校の制服は何と言うか・・・・・、そう、色気が足りない。昨今の情勢から見るに小学生に色気を求めるのはちと危険なのが、もう少し華を添える何かがあつてもいいのではないかと私なりに愚考する。

「忘れ物ない？」

玄関先で私は何時ものように朔にそう尋ねた。靴のつま先をコンコンと床のタイルに軽く打ちつけながら、朔は頷く。学業の事で朔は私に面倒をかけた事がない。その辺りは自慢じゃないが私に似て優秀だ。

と、思つたら、

「そうだ、忘れていた」

ランドセルを下ろすと中を「じゃじゃ」と探り、朔は四つ折にした紙を差し出してきた。

「期待はしていない。いつてくる」

「いつてらっしゃい」

まるでランドセルに抱えられたような朔の小さな背中がゆっくりと閉まるドアに隠れるまで見送ると、私は渡された紙を開いた。

「あ、もうこんな時期なのか」

私にまた一つ懸案事項が追加された。

* * * *

「おう、洗濯物が喜んでいん」

また奇怪しな表現をしてしまつた。メグが伝染つたに違いない。

昨日までの土砂降りの雨が嘘のような青空だつた。風は二階のベランダにすらりと並んだ洗い立ての洗濯物を揺らし、太陽がまたそれを際立たせ輝かせている。まったく爽快な風景だ。朝っぱらから洗濯機を唸らせた甲斐があつたつてもんだよ。朔が五月蠅いと怒る

かなあと思つたけれど、無い胸撫で下ろす事に何も言わなかつた。梅雨で始末しきれない溜まりに溜まつた洗濯物の数々や、洗つても仕方なく部屋干しするしかない、そんな見苦しい家にいるのは朔も余程嫌だつたんだろう。

可哀想だけど、可愛い朔も見れたし、洗濯物も片付いたし、今日は良い一日になりそうだなあ！ 等と喜ぶのは程ほどにして、私は玄関の戸締りはちゃんとしたか確認すると自転車に乗つて学校に向かつた。

何時ものように桜並木のトンネルを潜り、市内を横切る川の堤防沿いを走つていぐ。桜の花はとうに散つてしまつていて、緑の葉が色濃くなる季節を迎えていた。天気予報は梅雨明けは例年通りと言つていたけれど、どうなんだろう。風はこの季節には珍しく乾いて涼しく、空は突き抜ける青さだ。完璧な風景、と言つにはちょっと残念な事に、昨夜までの大雨が祟つて川の色は土砂で茶色く濁つていた。

『程よく完璧なのが丁度良いんだ』

お父さんの言葉を思い出してしまつた。

学校に着き、廊下まで騒々しく響き渡る賑やかな我が教室の戸を開くと、小柄で元氣なお馬鹿がショートカットの茶髪を靡かせ抱きついてきた。

「マコちゃん」

可愛らしくてそれでいて良く通る如何にもこの子に似合つ声は、弾みながら私のあだ名を響かせた。

「なあに、メグちゃん」

「宿題、み・せ・て？」

「い・や・だ。

と返すのが何時もの田課だつただけど、今日は機嫌が良かつた。

「いいよ」

メグの猫みたいなクリクリの大きな目が更に大きく見開いた。

「なに、なんかあつた？ もしかして今日クリスマス？ 大晦日？

一緒？」

「分かりにくいいなあ。盆と正月が一緒になつた、かな」

「そう、それ」

「何がそれだ馬鹿者め。取り合えず離してくれないかなあ」「やだ。好き」

「ああ、はいはい。私も愛してるだ」

それにしてもこの子は一日一回抱きついて告白しないと気がすまないのかね。周りのクラスメイトから冷かされながら、私は腰にまとわり付いたメグを引きずり自分の席へ向かった。

お昼時、メグがピンクのお弁当袋と紅茶のペットボトルを手に私の所にやつて来た。机に向かい合わせて毎日のように昼食会が始まる。

「相変わらずマコのお弁当はヘルシーだね」

「そう言うメグのお弁当は相変わらず冷凍食品ばかりだね」互いのお弁当を突つきながら私達は他愛もない話をする。昨日のテレビはどうだったとか、あの音楽が良いとか、格好いい先輩があのクラスにいるだとか、小倉先生の頭がどうだとか。本当に人畜無害・・・・でもないか、まあそんな感じのお喋りだ。こんな何でもない時間が私にはとても嬉しい。私はまだ高校生だったんだと気付かてくれるから。

でも、高校生らしからぬ話に及んでしまう時もあるわけとして・・・

「そう言えば進路調査なんて書いた?」

箸を伸ばす気になれなかつた冷凍食品のコロッケを「くり」と飲み干して、メグがそう尋ねてきた。春先の事を何故今更尋ねてくるのか。メグは右脳全開の人だから今更つっこまなかつたけど。

「お嫁さん」

爆笑された。何故?

「ゆとりだ。ゆとりがいる」

「お前だつて真つ中最中だろ?」

一頻り笑つたメグはペットボトルに手を伸ばしストレートティーを一気に飲み干すと、男前な顔で私の肩にぽんと手を置いた。

「そもそもその願いはもう叶つてるだろ?」

「まあ、ね」

いや、あれは奴隸とも言えなくもない。姉の威厳形無しである。

「新婚旅行は何処がいい?」

「はあ？」

またメグが訳の分からぬ事を言い出した。テニス焼けした浅黒い顔に今度は無邪気な笑みを浮かべて。小学生の時いたよね。こんな風に笑う可愛らしい男の子。出る所は出て引っこ抜く所は引っこ抜く腹立つほど立派な大人の身体なのに、そんな風に笑えるなんて素敵だな。でもね、それは当たり前なんだよ。メグの頭の中は小学生のまんまなんだから。

「エンゲージリングはこの際フルタブでもいいよ」

「…………私はお嫁に行きたいと言つてるんだが」

私を勝手に男だと脳内変換するな。しかもどうしてお前と私の結婚話に摩り替わってるんだ。メグがそんな事ばっかり言つから私達の間には妖しい噂が流れるんだろうが！ って、そんな事言つたとしてもメグは気にしないか。きっと「お互い様だ」と笑うんだろうな。大体だな、私のお弁当のおかずの金平牛蒡をそんな嬉しそうにもぐもぐ味わうなよ。そんな顔で食べられると嬉しくて何も言えないじゃないか。

「でもどうしてお嫁さん？ マコは男嫌いだよね？」

「いや、嫌いつて言うか、触れない…………」

『ご』によごによ言葉を濁す私の鼻先に箸を突きつけ、それをくるくると廻しながらメグが嘲笑う。

「男を寄せ付けぬ鉄壁ガード。付いた二つ名『鋼鉄の処女』。いや、カツコイイじゃないすか？」

馬鹿にしてんのかコンチクショ。そんなの初耳だぞ。それにそれは拷問道具の名前じゃないか。私は箸を置いて、水筒のお茶をコップに注ぎ、

「だからこそ。だからこそそれを乗り越えてくる人が欲しいのだよこぶしを握り締め思わず熱弁を奮ってしまった。ふーん、で済ましたが。

「実際マコは良いお嫁さんになると思つよ。頭もいいし、料理上手だし、何時行つても家は綺麗だし。才食兼、美？」

「何故途中で区切る。しかも変な漢字を思い浮かべるだらう」

才色兼備だ。馬鹿者め。

「顔もヅカつてゐるし」

「男装の麗人つてヤツ? めげるなあ

肩まであつた髪を「部活の邪魔だ!」とショートヘッドばつさり切つてしまつて、それでもしつかりと女の子に見える娘は流石に言う事が厳しい。私なんかせめて男に見えないようにと消極的ロシングなのに。でも思うんだけど、女装の似合う男、男装の似合う女、どちらがより悲惨なんだろうか。これってやっぱり性癖の問題も絡むんだろうか・・・・・つて、眞面目に考えていたら、胸の奥底からアンニユイなため息が漏れていた。

「いやね、私も自分には似合わないと分かつてるんだけど、気になる人でも作つてデートしたいなあと、運動部に入つて汗を流したいなあと、遅くまで遊んだりしてみたいなあと、そんな風に思つたりもするんですよ」

「おお、青春だ!」

でかい声でそれを言つた。恥ずかしい。

「でもね、それは許されないんですよ・・・・・」

私はコップを引っ掴み中身を一気に飲み干すと、ダン! と机に置いた。

「何ですか? 私は朔にとつて都合の良い主婦なんですか? 飲まなきややつてられませんよ!」

「お前は場末の飲み屋のサラリーマンか」

私は肩に掛かつた髪を掴みそれを指先にくるくると巻きつけながら、

「最近私、疲れた女の魅力とか備わつてきてない?」

「うん。生活に疲れたおばはん臭がする
容赦ねえな、こいつ・・・・・・。

「物は考え方

人のお弁当を丸ごと引っ掴み、メグがそう言つた。また何を言い

出すつもりだ？ 私は黙つて見守る事にした。

「私達もそのうち結婚して家庭に入るんだろうしさ、その為の修行だと思えばいいんだよ。大体私達は女なんですよ。結婚しようが子供が出来ようが生活に疲れようが生理が止まろうが。大切なのはね、どんな時でも女として心に張りを持たなきやいかんつて事よ」

ぽかーんとした。誰が言つた言葉だろうと思つた。

「訳分かんないけど、君は時々説得力がある事を言つよね」

誇らしげに出つ張つた胸を反らし、「もつと私を褒め称えたまえ」とメグは高笑いした。

うーん、馬鹿がたまに良い事言つと輝いて見えるよね。馬鹿つて得だな。でも取り合えず、一転して物凄い勢いで人のお弁当をかつ食らつてゐるこの馬鹿には、やつぱり『鋼鉄の処女』に恥じないお仕置きが必要だよね。

午後の最初の授業は何時も身が入らない。お腹も膨れて氣だるくて、まして寝不足に輪を掛ける春の木漏れ日のような陽射しに頬を撫でる心地いい風。真面目に授業を受けると言う方が奇怪しい。斜め前に座るメグはこくりこくりと船を漕いでいる。多分あれが正解なんだろうけど、小心者の私は申し訳ないやら勿体無いやらでそれが出来ない。だから私は窓の向こうに広がる白いママおはぎの群れを見ながらぼーっと思い耽るのだった。

『私は朔にとつて都合の良い主婦なんですか？』

自分で口走つておいて何だけど、ショックだつた。料理も掃除も洗濯も、家計のやり繕りだつて、私は楽しみながら家の事の一切合切をこなせていると思っていた。でも本当は不満だらけだつたんだ。男の子とテークしてみたい。部活に打ち込んでみたい。メグや皆と

遅くまで遊んでみたい。もっともつと羽を広げて自由にやりたい。

それが本音だと私は知ってしまった。

世界には六十五億人もの人がいて、そのうち日本にいるのは一億二千万人。そして都会とは比べるまでもなく何もない、まるで白ゴマおはぎみたいな小さな建物ばかりが目立つこの地方都市には、それでも二十万人もの人々が集い生活をしている。私は気付いたら此処で築いていた。私は近所で評判の妹思いな健気な姉。そして学校では何の面倒も起こさない成績優秀な模範生。でも違う。私は毎日毎日を必死になつてこなすのが精一杯だつただけだ。そして今も必死だ。全部、唯一人の為に。

その確率 1 / 6 . 500 . 000 . 000

何故朔は私の妹なんだろうか。

何故私は朔の姉なんだろうか。

何故私がでなければならなかつたんだろうか。

私でなくとも良かつたんじやないだろうか。

だつたら、朔が私の妹でなかつたらどうなんだろう。私は私の今までいられただろうか。メグに誘われテニスに明け暮れていただろうか。いや、そもそもメグと出会えてなかつたかもしれない。それ

どころかグレして高校すら入れなかつたかもしれない。

きつと家事なんて何も出来なかつたろう。店屋物やコンビニのお弁当ばかり頼つて、ぶくぶく醜く太つていたに違いない。家はゴミ屋敷だと近所で評判になつてただろうか。だつて私が家事や勉強を頑張っているのは、せめて少しでも朔に姉らしい所を見せたい為なんだから。

その朔が、重い。

私には朔が分からぬ。

・・・・・

何だ、このメロンワードーな螺旋迷宮は、終わりがないではないか。

私は「あーあ」と声を上げると、墨でグロッキーなパグみたいに机に倒れこんだ。

「ひび、そこ…」

授業中だとこうのをすっかり忘れていた。

「コロッケが好きだ。

姉妹揃つて大好きだ。熱々のヤツは特に美味しい。サクサクでほこほこで。正座して手を合わせて、あの金色のお姿を拝みたくなる。「ほ」と言うわけで、今晚はコロッケにしよう。

メグのお弁当を見てからそう決めていたんだ。これならあの小姑染みた欠食児童も文句は言うまい。じゃがいもと玉ねぎをカゴに入れ、ツナ缶を探し求めつつ他にめぼしい物はないかとまだ人の少ないスーパーの店内をうろついていたら、近所のおば様集団と出くわしてしまった。

・・・・・いや、皆さん、私を我が娘のように可愛がってくれるのはとても嬉しいとても在り難いのですが、コロッケがですね、ここでこうして井戸端会議しているとですね、コロッケがですね・・・・・。

「コロッケ・・・・・。

無駄話、もとい、社会的意見交換をしていたら、血の気が引く程遅い時間になってしまった。慌てて飛んで帰つたら、リビングの真ん中で朔が膝を抱えてテレビドラマの再放送を見ていた。夏の太陽は傾いて目に染みる夕焼けが大きな窓から差し込み、ドラマは正にこれから悲しい終わりを迎えるとしている。朔の小さな背中。そこに落ちる赤い影。悲しいBGM。なんて切ない画なんだろう。その寂しそうな背中、ぎゅっと抱きしめてあげよう。私は静々と朔に近寄つた。

「帰るのが遅い！早く飯を作れ！」

「はい、すいません」

振り向き様の心臓を射抜く鋭い眼光と声。私は反射的に謝ると、回れ右してすぐさまキッチンに立つた。

今でこそ姉に対する敬愛なんて欠片もありやしませんがね、こんな妹にも可愛い時があつたんですよ。昔から余り口数は多くなかつたし、少々生意気な所はありましたけど、ちょっと失敗して焦がしてしまつた料理を美味しいと言つて気遣つてくれたり、そんな優しい所もあつたんです。日向ぼっこが大好きで、何時も何時も私の後を引っ付いてきて、ぎゅつしてあげるとお口様の匂いがして、とても幸せそうに笑つて。それが今じゃ・・・・

「不味い。大体じやがいもに味が染みてないではないか」

鍋奉行ならぬ煮物奉行ですか。コロッケ作る暇がなかつたから、じやがいもと玉ねぎと人参とちくわを万能調味料と醤油で煮込んでみましたか、お気に召しませんでしたか。でもそんな一太刀で斬つて捨てるほど不味いか？ 染みてないか？ 味見したしそんなはずないんだけど。

「ごめんね、作り直そうか？」

「いい」

首を振ると、朔は味噌汁を啜つた。今朝のワカメの味噌汁もどきの味を調べ、それに溶き卵を加えたやつだ。在庫一掃処分だと大量に卵を投入した贅沢な一品は無言でスルーされ、朔の箸は切つて千切つて盛つただけのツナ野菜サラダのきゅうりへと伸びた。

「美味い」

負けた。料理とは言えない代物に負けた。モウナニーツクツテイイノカワカンネーヨ。

「麻はあれだな。もう少し料理の心を知るべきだな」

その前にお前は姉の苦労を知れ。

それきり黙々と背筋正しく三角食いする朔。向かいからそれを眺めて食事を取る私。テレビを消して取る何時もの静かな食事風景。うーん、どう考へても私じゃないよな。誰の影響なんだろう。前から気になつてた事を私は朔に尋ねた。

「朔はそんな言葉使い何処で覚えてくるの？」

私にも伝染つて大変なのですが。

「本だ。歴史小説が主だな」

家には本が山のようにあるのですが、寄りにも寄つて姉の私もまだ手を出さない所へ行きましたか。

「お茶」

「はいはい」

なんなんでしょうかね、我が妹は。あれだけ煮物に文句を付けておきながら、小さな口で一口噛つては渋いお茶をすすり、嬉しそうに「ほう」とため息をついて。反抗期なのかな。でも年齢的に早すぎるしなあ。いやいや、朔に平均的な統計を押し付けるのは間違いだろう。煮物と歴史小説と渋いお茶が好きな小学校三年生なんて世界広しと言えどそつはいない。

「これも六十五億分の一なのかねえ」

朔が不思議そうに小首を傾げた。

* * * *

夜の帳は降りて、静かな住宅団地に灯る明かりが一件、また一件と消えだすには少し早い頃、私は眠りにつく為の準備を整える。戸締りとガスの元栓の確認をして、一階の電気を全て消して、先に部屋に戻りもう眠りについてるだらう朔を起こさないようじ氣を使い、そろそろと暗がりの階段を上る。自分の部屋の扉を開き、手探りで部屋のスイッチを探すと、味気ないほど殺風景な部屋に明かりが灯つた。

普段なら予習復習をしてベッドに入るのだけれど、今晚は違った。私は机に座ると棚に置いた例のノートを取り出し、文字を指で追いながらぶつぶつと呟き朔が昨夜見たものを頭の中に叩き込み始めた。昨夜、朔は悪夢を見た。

そして今夜は私が見る番なのだ。

子供の頃、海水浴に行つた時の事。海の上にぽっかりと顔を出すテトラポットまで浮き輪を着けて泳いでいった。その半ば程で、私は何気なく海の中を覗き込んだのだが、それがまさか夢にまで出てきそうなトラウマにならうとは思いもしなかつた。まあ、その頃には既に夢を見なくなっていたんだけど。

水中メガネ越しに見た海の中には何も無かつた。あつたのは視界の悪い、緑茶けた海水だけ。でもその色は深くなるほどに濃さを増していった。ぽっかりと口を開いて何もかも飲み込んでしまった。暗い暗い色が、ゆらゆら揺れる足元に何処までも何処までも続いた。それを見た瞬間、その場所から逃げ出したくなつた。私は立ち上がると、水柱を立たせながら暴走する機関車の如く水面を蹴つて陸へ舞い戻つた。思いだけは。実際は桜の花びらが舞い散る程の速度で、殆ど半泣きで戻つたんだけど。そしてそれから、一度と海に行こうと言わなくなつた。

あの日見た海の中、その続きを聞いた。

がらんどうの暗闇の中を滑るように落ちていた。瞼の裏を見るような狭つ苦しい暗闇じゃなかつた。やたらだだつ広くて、方向なんてなかつた。在るべき基準が見当たらぬ。だから上も下も左も右も無い。暗闇に溶けてしまつたのか、私の身体は何処にも無かつた。不思議だつた。こんな救いようの無い状況で、どこぞの女子高生の胸のよう年至極平坦な気分でいられることが。こうして此処に来るのは四度目で、それなりにこの状況に慣れてきたからだろうか。でも思い返すと、初めて此処へ来た時もこんな感じだつた。そりやそうだ。あの日海の中で瞬間に感じたのは、飲み込まれてしまつたら心も身体も冷たく、そして消えてしまつて決して戻つてこれない、そんな恐怖だつた。けれど此処は違う。私の身体は無い、けれど私は此処に在る。だから感じられる。方向の無い暗闇の中を墮ち

る、そんな矛盾を。それどころか、この暗闇が私自身のよつな、そうでもないよつな、どつちなんだよつて、この微妙に研ぎ澄まされた感覚さえも。

この闇に好奇心が刺激されないわけじゃない。でもそれ以上に退屈なんだ。だから退屈を紛らす種を拾い集めてしまう。苺のタルトが美味しそう。でも紅芋アイスも捨てがたい、みたいな。意識があつちこつちに散らばつて、何か一つに絞れない。浮かんでは消える思い出達に振り回される。そのうち、辺りの様子は変わり始めた。

研ぎ澄ました感覚が見えないものを捉えだしたのか、到る所で暗闇に色が流れ込み始めていた。赤、青、黄、緑、紫・・・・。カラフル？いや、下品。どれこれもチカチカする原色の色はどんどん暗闇を侵食していく。互いにぶつかり、混じり、でも決して交ざらずに、渦巻きながら地層の断層のような模様を描く。私の中を汚されてしまつたみたいで、趣味の悪い服を着せられたみたいで、無性に気分が悪い。

よく見ると、色の一つ一つは蠢いていた。夢だ。この色の一つ一つが夢なのだ。今この時、誰かが見てるだろつ夢。空恐ろしい数の夢。なんて混沌として気持ち悪いんだろう。やつぱりここは生理的に受け付けない。人が隠しておきたいことを無理矢理見せ付けられてるみたいで虫唾が走る。ちょっとでも覗いてみたって働くこの気持ちが厭らしい。

余り意識しないよつにして、私はもつとずつと奥底、夢のじつた煮シチューの鍋底へと落ちていった。

そのうち、とん、と地に足が付いた。閉じていた目を開くと辺りは一変していた。車一台通れないだろう、曲がりうねる土の道。古びた民家がずっと先まで軒を連ねていた。塀も垣根も何もかもが迫り来るよつに高い。風は凧、見上げた空は遙か高く青く丸い。魚眼レンズで覗いた世界。

私は不安げに、縋るようになに誰かの名前を呼んだ。答えはない。通りには誰もいない。耳が痛くなる程に静かだ。

道と道が交差する真ん中で、私は見知らぬ町の迷子になつて途方に暮れて立ち尽くしていた。

立ち並ぶ平屋造りの家は、貧相な肩を抱き合わせなければ立つていられない恋人達のようだった。その癡塀も垣根も異様に高い。プライドだけは一丁前だ。等間隔に並ぶ木の電信柱は青空に手を伸ばすアートなモニメントみたい。欒は緑濃い葉を茂らせ、桜は薄紅の花を散らし、道端の蒲公英は綿毛を揺らし、向日葵は太陽と大輪の花を比べっこして、それと対照的に水仙は白い影を探し俯いてる。懐古の情さえ感じる在り得ない世界。そして私も。肩で切り揃えた髪、白いワンピースから突き出た生白い手足。足元から伸びる影はやたら細く小さく・・・・・、

「真っ白だ」

呴いた途端に、何かが切れた。ガタガタと身体が震えだした。勤めて冷静であるとしていたんだけど、もう無理なようだった。震える身体を押さえ込もうと抱くのだけど、ちつとも言つことを聞いてくれない。頭の中が霧がかつてる。これは私じゃない。私はこんなに小さくない。何故そう思うのだろう？そもそも此処は何処なんだろ？いや、何より私は誰なんだろう？そんな言葉ばかりが浮かんで邪魔をする。もっと大切なことがあつたはずなのに思い出せない。自分が誰か分からぬ。私は此処に在る、なのに私が無い。

「朔・・・・・」

もう一度、私は誰かの名前を呼んだ。不思議な呪文を唱えたみたいに、霧がかつていた頭の中が急速に晴れていく。

撫菜 麻子

混乱していた頭に自分の名前が浮かび上がる。そうだと気付いた途端に小躍りしそうな程に胸が弾みだした。私は胸一杯に息を吸い込んで大声で訳の分からぬ言葉を叫ぶと、目印にしている竹林が飛び出た緩やかな坂道の路地に向かって走る！

叫んで、笑って、はしゃいで、くるくる廻つて、今度はジグザグに。丸いポストに抱きついて、青い大きな「ミバケツ」に飛び乗つて足を踏みしめポコポコ鳴らして、直ぐ隣の電信柱に抱きついて身体いっぱい使つて揺らしてみて、お気に入りのワンピースが泥だらけになるのも構わず水溜りでバシャバシャ飛び跳ねて。

なんて楽しいんだろう。通りにある何もかもが私の玩具に変わる。目に映るもの全てが新鮮で色鮮やかで驚きで満ちてい。ずっとこのまま遊んでいたい。けれども軒を連ねていた民家が途切れ、変わりに赤茶けた土山が顔を覗かせるようになると、緩やかな坂道は心臓破りの坂へと変貌していた。その頃には私の足取りはすっかり重くて、電池はすっからかんだった。そりやそうだよ。こんなちっぽけな身体で後先考えず遊んだりするから。

頬を伝い落ちた大粒の汗が乾いた土に染みこんでいく。髪の毛が邪魔だ。肩が重い。心臓が五月蠅い。休みたい。でも私は足を止めない。犬みたいに舌を出してゼイゼイ言いながら坂道を登つていく。知っているんだ。この坂道の先、あの木々が枝葉を伸ばして覆い茂るトンネルの向こうでは、私を待つているんだ。

自分を励まし坂道の頂に立つた私。それを待つていたかのように、匂いでいた風が潮風を纏い吹き付けてきた。眼下に広がる壮大な風景は、苦労した自分へのご褒美と言つには余りにも大きな成果で、私は声を失つた。

苔むした石瓦の民家が広がっていた。その先に見える入り江は霞み、浮かび点在する森の島はおぼろげな幻のようだつた。遙か続く瑠璃色の海と紺碧の空は、その境界線を何処までも曖昧にしている。空も海もない、上も下もない、何処までも青い丸い世界。

言葉も出ない。思いつかない。そんなもの必要すらなかつた。私は頂に立つてただ飽きるほどパノラマを眺めていた。髪を頬を腕を足を、体を触り吹き抜けていく風の愛撫を心地よく受け止めていた。

「案外大した事ないじゃん」

泳ぐことも分けないかもしけない。軽口叩けるならもう十分だろう。疲れてなんかいられない。いや、そもそもなかつた。私は何処までも走つていける。

急勾配の下り坂をブレークの壊れたジェットコースターのように私は走り出した。何時も勢いが付き過ぎて途中で空回りしてすつころんでゴロゴロ転がるんだけど、大丈夫。私は無敵だ。

すつころんで擦り剥いて流れ出した膝小僧の血はすっかり固まつてくれたんだけど、脳内鎮静物質はネタ切れを起こしてくれやがりましてどうもありがとうございました。下り坂を駆け走つて、広い舗装された道路へ突き当たり、「ゴールだと思った途端にズキズキ痛みだしたんだけど、まったく、人の身体は良く出来る。真向かいの御影石の階段を、足をぴょこぴょこさせながら上つていった。

歩幅の広い階段を上りきると石畳が真っ直ぐに、古い大きな家へと続いていた。堂々たる構えの家はお屋敷と言つた方がしつくりくる。格が違うと言うか、ここに来るまでに見たどの家より立派で、神社やお寺のような凛とした空気さえ感じた。雪が積もったかのようだ、だだつ広い玄関先に敷き詰められた玉砂利がまたそう思わせるんだろう。背筋が伸びるこういう雰囲気、結構好きだ。石畳の継ぎ田を踏まないよう玄関へと向かつてゆく。

曇りガラスの入つた玄関戸は見た目の重厚感通り重かつた。この身体は非力すぎる。苦労して戸を引くと、私の影がすつと伸びた。屋敷の中はひんやりとして真っ暗だった。浅黒いがつしりとした柱に掛けられた、これまた古く、多分まったく役に立つてない柱時計の音だけが響き渡つている。またあの人は何処かの部屋に引き籠もつているのか。こんな良い天気に勿体無い。

「おばあ、来たよ！」

T字の右端の方から立て付けの悪い戸を引く音がした。天井からぶら下がつた裸電球にオレンジ色の素朴な明かりが灯り、床板が軋んだ音を立て、それはゆっくりと段々近付いて来る。やがて、上がり框に腰掛けてぶらぶらと足を揺らす私の元にやって来たのは、赤いワンピースを着た女人の人だった。おばあだ。

「いらっしゃい、よく来たねえ」

廊下からやって来るまでの足取りと同じ、ゆっくりとした口調だ

つた。腰まで届く長い髪を揺らしておばあは床に膝を着くと、私へ手を伸ばして頭皮から額から流れる汗を指先で拭つた。

「またいっぱい遊んできたんだねえ。楽しかったかい」

一件怖そつな印象を『えてしま』う切れ長の目。でも私を見つめる眼差しは、坂道で見たあの海のように何処までも穏やかで優しい。私はおばあに見つめられ、触れられるのが嬉しくて「うん」と大きく頷き、

「そしてまたもやつてしましました」

なんでだろ? 怪我とか病気とか、見せびらかして言い振り回しだくなっちゃうのは。私は足を上げるとおばあに固まりつつある傷口を見せた。おばあは傷口をつんつん突ついて、悲鳴を上げる私を見て笑う。

「大した傷じやないねえ、舐めとけば治るわ。それよりお風呂沸かしておいたから一緒に入ろう!」「やたー!」

叫んで、私はおばあに向かって両手を伸ばした。おばあに貰ったワンピースは泥だらけだ。おまけに私は汗まみれで汚れ放題。でもおばあはちっとも気にせずに、私を抱き上げ包み込んでくれるんだ。

* * * *

初めて暗闇に墮ちてあの辻に立ち尽くした時、私は本当に無力な子供だった。ここが何処で私は誰なのか、思い出そうとしても何も思い出せず、だからと言つて何か考えて行動を起こすわけでもなく、めそめそ泣くだけの本当に情けない子供だった。すっかり泣き疲れてしまった私は、その場に座り込んでうとうとし始めた。漂うような、飲み込まれるような感覚は久しぶりで、微睡みを楽しみながら重い瞼を閉じようとした。その間際に、通りを走つてくる人影を見付けた。

映画のワンシーンを見ているみたいだつた。黒く長い艶やかな髪

を靡かせ、女の人が走つてくる。白いワンピースが跳ねて閃いて、力モシ力みたいな細くて力強い太腿が顕わになつていた。でもその人はそんなのちつともかまつてなかつた。やたら長い手足を動かすその姿は懸命で、感動を売りつけようとする下手な番組より余程引き込まれた。

でも睡魔の方が勝つちゃつた。綺麗な女人。私もあんな風になりたいな。ほんやりと薄れていく意識の中でそう思いながら私は目を閉じた。

そしたら、ビンタが飛んできた。一発も。

「麻子、こんな所で寝ちゃだめ！」

肩を激しく揺り動かされてすっかり目覚めた私だが、痛いやらびつくりやらで今度は火が点いたように大声で泣き出した。彼女はそんな私を抱きしめた。柔らかくて優しくて、蜜柑の匂いがした。

「ああ、ゴメンね。痛かつたね。びっくりしたね」

そう謝りながら彼女は、私が泣き止むまで優しく背中をぽんぽんと叩き続けた。

「お姉ちゃん誰？」

声をしゃくらせながらそう尋ねる私に、彼女は涼しげな目を細くして私に答えた。

「お姉ちゃんじゃないんだよ。おばあだよ」

それがおばあとの出会いだつた。

歳は二十代半ばくらいだろうか。夜に浮かぶ青白い月に似た、静かで涼しげな雰囲気を漂わせる成熟した艶っぽい大人の女性。それが何故自らおばあと呼ぶのか、私には分からない。でもそんなのどうだつてい。時間が狂つてしまつて、みんな何かが何処か奇怪しいこの世界で、私だけでもダメ。おばあだけでもダメ。私とおばあが揃つて、初めて正しくこの世界を進められる。その時間を大切にしたい。・・・・なんか無駄に壮大になつてしまつた。私は只、おばあのが大好きだつて、それだけ。

そのおばあは湯船で私を抱きかかえながら、さつきからずつと頭

を撫で続けてくれていた。私が悪いんだ。脱衣所と言つには余りにだだつ広い板の間で服を脱いで、軽快に鳴る曇りガラスの引き戸の向こうを見た瞬間、私の中の手綱が切れた。

溢れ出したお湯は床板を滑るように流れて、私達の足を温かく濡らした。檜の匂いが鼻を擦る。お風呂に居るのに森の中にいるような感じ。壁も床も天井も、暖かな明るい木の板で囲まれていた。何より、段差のない埋め込まれた泳げそうなほど広い木製の浴槽。お湯がみなみと張られ、開け放たれた窓から差し込む陽射に波打ち煌いていた。

どうもこの身体がいけない。多分そうに違いない。私はまた大声で、文字で表現できない奇声を発すると、浴槽に向かつて駆け出しダイブした。が、すぐさま悲鳴を上げて浴槽から這い出でた。「染みる・・・・・」と片膝を抱え呻く私の視界の隅に、白い足がすっと入り込んできた。ハツとして顔を上げたら、おばあが満面の笑みを浮かべていた。そして私の頭に天罰が落ちた。

ユニットバスしか知らない私には、こんな立派なお風呂はそれこそプールみたいな遊び場になってしまつんだけど、おばあにしてみれば毎日当たり前に使う、疲れを癒すお風呂なんだよなあ。迷惑この上ないな、私。おばあの柔らかく大きなシロモノに後頭部をぽんぽん押し付けながら反省になつてない反省をする。ふと思うことがあつて、私は下世話にもおばあに尋ねてしまった。

「おばあってやつぱりお金持ち？」

手を止めて、おばあは天井を仰いだ。

「まあ、無いことは無いねえ」

言い難そうだった。これが金持ちの品つて奴か。おばあはきっと国産牛バラと豚コマのパックを両手に悩んだりしないだろうな。

「大きくて立派なお屋敷だもんね」

「必要もないのに大きく見せびらかしてるんじゃないよ。大きくなけりやならない理由があるのさ」

理由？ なぞなぞか。上は洪水、下は大火事なのか。

「お客様が多いから？」

「お客様ってほど上等な奴らじゃないがねえ。どいつもこいつも大酒飲みで、夢見たいなことばっかりふいて、スケベで、その上臭いときてる」「最悪だ」

おばあは軽やかに笑った。

「そうそれ、最悪。この風呂場だつてそりゃ。一つ一つ洗濯物を洗つてたんじゃキリがないだろ？だから全員叩き込んでイモ洗いする為に大きな風呂にしなけりやならなかつたのさ」

随分酷いことを言つてゐるんだけど、おばあの口調はとても楽しげだつた。その人達のことを大事に思つてゐるんだろ？しかし、湯船に叩き込まれれひしめき合う真っ裸の男達？阿鼻叫喚の地獄絵図だな。金棒を肩に掛け颯爽と立つ、赤いワンピースを着た鬼までも浮かんできた。

「じゃあさ、おばあがお屋敷に引きこもつてるのはその人達が尋ねてくるから？」「一瞬間が空いて、「まあ、そんな所かねえ」と天井を見上げ、お

ばあは答えた。

「どうか。おばあの肌が白いのはその人達のせいか」

おばあの手を取り、手を重ねる。長くて大きくて力強い、ピアニストみたいな美しい手。この手に触れられるのが嬉しくて仕方ないのは何故だろう。何か秘密があるに違いない。

「そう言うお嬢ちゃんだつて白いじゃないか」

「私は外に出て体を動かしてゐ方が好きだもん」

ペたぺた触り、しげしげ見つめて、謎の解明を急ぎつつ答えた。

「かけっこかい」

「走るだけじゃないよ。野球でもサッカーでもテニスでも、外での運動ならなんでも好き。疲れるけどね、あの真っ白になつていくのが好き」

さすが金持ち。財運線が太い。こりや生糀のギャンブラーだな。

と、おばあの手がすりぬけた。

「そうだねえ」

するぬけた手は、吸い付くように私の頬に張り付いてきた。そのまま、餅でも作るみたいに捏ね繰りまわしだす。

「家の中にずっといたら腐つちまうねえ。お嬢ちゃん、今度お祭りに行こ」うか

祭り！？ それに反応して、首を捻り顔を上げた。唇の端を吊り上げた嬉しそうなおばあと田が合づ。

「屋台は出るの？」

「もちろん出るさ。神輿も出るし盆踊りもするし、花火も上がるよ」

「天国だ！」

おばあは笑つた。

祭り・・・・・。綿菓子、りんご飴、カキ氷、クレープ、チョコバナナ・・・・・。

お祭りの予行練習、ってわけでもないんだろうけど、誰が用意したのか、お風呂から上ると汚れたワンピースは浴衣に変わった。

じつして風情を偲ばせる雅な物に御目に掛かるのは何時以来だろう。そんな色気の欠片もない女が一人で浴衣を着れるはずもなく、私はおばあに頼んで着付してもらう事にした。浴衣つていいな。糊が利いたひんやりした浴衣は火照つた体に気持ち良く、身が引き締まる思いがする。

「完成」

ぽんと背中を叩かれ、早速袖の端っこを掴み体をくねらせた。白地に藍色のひぐらしの絵柄は男の子が着るみたい。然もありなん。私に似合つと思って選ばれたに違いない。だったら帯はどんな形をしてるんだろう。まさか糀な感じに仕上がりやしないだろうな。心配になつた私は大きく体をくねらせ、目の届かない自分の背後を追いかげぐるぐる廻りだした。そのうち廻つていることが楽しくなつてきて、すっかり本来の目的も忘れてはしゃぐ私は、やがてふらふらになつて引っくり返つた。歪んで二重になつて揺れる天井。危ない危ない。バターになる所だった。

「何してるんだい」

視界の端におばあの呆れた顔が覗いた。照れ笑いして、体を起こした。私の脇に佇む、重なつてぼやける一人のおばあはすっかり自分の着付けを終えて、やっぱり浴衣を完全に自分の物にしてしまつていた。白地に薄紅色の折鶴の絵柄。帯の位置が高いなあ。浮かび上がる柔らかな丸みを帶びた体の線は艶っぽく、それに輪を掛ける涼しげな目。匂い立つようないい女とはこう言つことか。

私は複雑な気分になつた。おばあが綺麗である事は誇らしい。皆に自慢したいくらい。けれど、これは何だろう。ぐちぐちした瘡蓋

を剥がすよつた、痛いよつたこそばゆいよつた、それでいて何処となく後ろめたいよつた。そんな気分を誤魔化すように私は言った。

「おばあ綺麗だね。凄く似合つてゐる」

おばあはにこりと笑う。

「ありがとうねえ。お嬢ちゃんも似合つてゐるよ。可愛いよ」

可愛いなんて言われるのは久しぶりで照れくさかつた。けれど嬉しかった。にやけてしまつ顔を見られるのが恥ずかしくて、私はおばあに抱きついた。

「今日は何時にも増して甘えん坊だねえ」

「そんなことない」

おばあは私を抱き上げると、すべすべとした頬を摺り寄せ歩き出した。真っ白く長い首に両手を回し、より一層強くしがみ付いて私は目を閉じる。柔らかな感触を心地よく歓迎しながらも、少し腹立たしい気分でいた。

眠りにつくまでの間、青白い月明かりに浮かび上がる私の部屋の輪郭。それを見ながら、思い返していた。この暗闇を怖がるふりをして、母さんの布団に潜り込んだのは何時の頃だったろうか、と。あの頃の私は本当に素直じゃなくて、何か理由を探さなければ甘えることも出来なかつた。あの時のように怖がる必要はない。何か理由を探す必要もない。そんな事しなくとも、おばあは私を抱き締めてくれる。でもおばあは如何してそうしてくれるんだろう。こんな何もない私を可愛がってくれるんだろう。こんな

おばあは何も分かつてない。

* * * *

さつきまで真っ暗だった長い廊下には眩い程の白い光が差し込んでいた。また誰かが先回りして、閉めていた雨戸を開いてくれたらしい。浅黒いがつしりとした柱や真っ白なだけで飾り気のない障子がはつきりと姿を現している。それは長い冬を越えて待ち望んだ春

がやつて来たかのような、そんな鮮烈な印象を刻んだ。

光と影、白と黒、質実さと繊細さ。この屋敷は古臭くて静かで、時間が止まってしまったかのよう。まるで後ろ髪を引っ掴まれて振り返らずにいられない、ずらりと並べられた美術品を鑑賞しているみたいなんだけど、それだけじゃない。暖かくて親しみ深い何かがここには息づいている。それが何なのか、私は注意深く流れしていく屋敷の中に目を凝らした。長い廊下が、おばあの歩調が、恐ろしく短く速く感じる。

「うー」

「どうかしたのかい！？」

鋭い声が飛んだ。胸の底から込み上げてきたくぐもった唸り声に、おばあは足を止めて過剰な反応を示した。眠ろうとしていた私を引つ叩いて起こした時みたいに。

「あー・・・・・、遊び過ぎて疲れたかなー」

笑つて誤魔化す私をおばあは強く抱きすくめた。甘くて酸っぱい胸がすく匂いに頭の芯が軽く痺れた。

と、思考回路に閃光が走った。

臭いだ。この屋敷に染み付いた臭い。生活臭。どうりで暖かくて親しみ深いわけだ。当たり前だけど、当たり前すぎて気付かなかつた。どんなに立派な屋敷だろうと、ここは人が暮らす家なんだ。臭いが染み付く程の年月を、人と共に在り続けた家。そしてこれからも、おばあの為に在り続ける家。

そう気付いたら、辻に立ち尽くした時のよだな途方に暮れた気分になつた。さつきから私は何なのだろう。ちょっとセンチになりたいお年頃なのか？ そうやつて自分を笑つてみたけど、付き纏う不安は収まらなかつた。私は縋るようにおばあを見た。おばあは何かに見とれていた。すつきりとした鼻から顎、首までのライン。綺麗な横顔だつた。おばあの眩しげに細くした目に釣られて、私も外へと顔を向けた。玉砂利の庭の向こうには家が立ち並び、私が通つて来た道が山の頂まで続いていた。まるで万里の長城でも越えてきた

かのような万感の思いが込み上げてくる。ちょっとオーバーだな。
でも私を褒め称えるみたいに、山の頂には大きな入道雲が湧き上が
つていた。

「凄いね」

「ハ雲立つ、だねえ」

十重二十重に湧き立つ雲。それを見ていたら、急に胃袋が恋しく
鳴つた。

「ソフトクリーム食べたい」

私の顔を覗きこんで、おばあは顔をくしゃくしゃにして、大声で
笑つた。

「残念。ソフトクリームは用意してなかつたねえ」

おばあはそう言つと廊下を横切り、障子に手をかけて開いた。真
っ先に緑の庭と真つ青な海、真つ白い雲が田に飛び込んできた。そ
れから陽射と共に畠の上を滑るように伸びる軒の影に田がいつた。
波のざわめきと風の囁きだけが響く、黒塗りのちやぶ台一つだけが
置かれた殺風景な床の間。でも「ひこは、おばあを取り巻く全てが
在る。

まだ。またこれだ。どうじてしまつたんだらう、私。どうじて
こんなに不安なんだらう。どうじてそんな事を思つんだらう。私が
消えてしまつだなんて。あの坂の頂で私は見たじやないか。この海
も空も町も。前も、その前も、私はこの部屋でこの景色を見たじや
ないか。あの時と何も変わらないじやないか。なのにどうじてこん
なに・・・・・。

「さあ」

おばあがゆっくりと腰を落とし、私を畠の上に下ろした。地に足
が付いて、私は益々不安になつた。何もかも皆、見上げる程の高さ。
私はこんなにも小さい。どうじて私はこんなに小さいんだらう。こ
んなんじや、私は何も出来ない。

おばあの手が肩に触れた。びっくりして、私はおばあを見上げた。
不思議そうな顔でおばあは尋ねた。

「どうしたんだい、わつあから元氣がないねえ」

「そんなことないよー。」

わざと大きな声を張り上げ、私はちやぶ台の前に座った。目の前には汗を搔いた琥珀色したコップとおやつが用意されていた。

「いただきます」と両手を合わせる私。

「召し上がり」とおばあ。

さつきまでグーグー鳴つてたお腹は何処へやら。食欲がまるでなかつた。胸の奥底に沈殿するベドロみたいなものが迫り上がり張り付いてくる。再び奥底に沈めようと、私はコップを手にして一口啜つた。

口から喉へ、喉から胃へ、胃から全身へ。冷たい麦茶はあつと言う間に染み渡つていつた。一口啜つて気付いた。ベドロどころか、私は砂のように乾ききつていたんだなと。食欲がまた戻ってきた。私はおやつを手にして、一口かじつた。

「美味しい」

唚然として私は呟き、また一口かじつた。凄いなと思った。サクサクもちもちのジューシー。パンの耳を揚げて砂糖をまぶした、ただそれだけの物。なのにこんなにも美味しく、優しい。口に広がる甘い味に、私は救われたような気がした。

「美味しそうだねえ。おばあにも分けておくれよ」
すつと伸びてきた手を、私はペンと弾いた。

「ダメ」

「いいじゃないか、減るもんじゃあるまいし」「減るよ。思いつきり減るよ」

「ケチ」

「ケチで結構」

誰がやるもんか。

多分、パンくずが散らばった皿の上に残された三切れのおやつは、すっかり冷えて不味くなつてゐる。こんなことならおばあと仲良く半分こすればよかつた。出来ることならティッシュに包み懐に入れて持ち帰つて、ホットミルクに浸して美味しいいただきたいけれど。性分なのか意地汚いだけなのか、それが皿に入るときになつて仕方ないから、おばあに膝枕をしてもらひながら、ぼーっと庭先を眺めていた。

庭は鮮やかな青い芝生が広がつていた。蜜柑の木はたわわに実つた果実で枝を撓らせている。夏なのか秋なのか冬なのか、それとも春なんだか。陽射は穏やかな昼下がりを運んでくる。ここに朔がいたらどれ程喜ぶだろう。夏の西日はじりじりと肌を焦がすから、最近ではリビングで丸まつて微睡む姿を見なくなつてしまつた。

朔、今頃何してるかな。

久しう帰つていない故郷を思うような望郷の念にかられた。時間が迫つてきている。夕暮れ、蝉時雨の止んだ夏の終わりのような物悲しさが私を包んだ。

私はおばあに話しかけた。

「おばあは何時も肝心なことを聞くのとしないよね」

「肝心なこと?」

「朔のこと」

ああ、と思い出したようにおばあは呟いた。惚けてるんだろ? が。良くなつてない。

「私がここに居るつてことは、朔がまた悪夢を見たつてこと。おばあはその夢を知りたいんでしょう? どうして聞こうとしないの? 少し責めるような口調になつてしまつた。「ごめんなさい」そうやって謝るくらいならもうと考へて話せばいいのに。
「何を謝るんだい」

氣にしてないよ、そう付け足すようにおばあの手が髪を撫でる。
おばあは優しい。その優しさが益々私を不安にさせる。

「本当はね、話したくて仕方ないんだ。朔のこと、一人で胸の中に抱えてるには辛いから。友達に全部話してしまおうと考えたこともある。けれど話せなかつた。何か奇怪しなことに巻き込んでしまうんじゃないのか、そう考えたら話せなかつた。でも私はおばあに話してる。何時かおばあに迷惑をかけてしまうんじゃないのか、そう思いながらも、おばあの優しさに甘えてる。だから、ごめんなさい」言葉を吐き出す程に痛みが突き刺さる。痛くて、申し訳なくて、もうおばあの顔を見れない。そんな私の前に、ひょいとおばあの顔が覗きこんできた。

「取るに足らないねえ。そんな顔して謝るには」

おばあは皿を細めて笑つた。

「それに、おばあはお嬢ちゃんに甘えられるのが嬉しいんだけどねえ」

「おばあ・・・・・・」

「話してくれるね、おちびちゃんの見た夢の」と
『めんなさい』と私はまたおばあにそう謝つた。

* * * *

一年生の頃、伝言ゲームをしたことがある。やううと言つ出したのはメグと私だつたんだけど、皆も何だかんだとノリが良いのでクラス全員を巻き込んでしまつた。『ジョンは犬と散歩に出かけた』。英語の教科書から適当に引っ張り出したなんでもない言葉は何故か、『小倉先生の帽子を取つたら丸い皿が乗つていた』に代わっていた。悪ふざけの切つ掛けを作つたのはおそらく、クラス一の愛すべきお馬鹿の仕業だろ？

しかしさえも伝言ゲームなのだ。情報は人の手を離れるほどに本来の価値を失つていく。私は腐心した。ただ在るがままに、朔

の訴える悪夢をノートへ刻んでいく」と。それは偏見、芥川でこうしておばあに伝えるために。

そうだと、思いたい。

「また奇想天外な話だねえ」

私の口から語りられる朔の悪夢。その間中、おばあはただ黙つて海を見つめ続けていた。話を終えてもしばらくそんな風だった。そうしてようやく、おばあにしては控えめな表現を零した。

支離滅裂とも言つね

そもそも話になつていない！ 漫画でも小説でも写真集でもいい！

おにぎりを束ね 無作為に一ヶ所だけを
並べていつたら一体どんな物語になるだろう。二種類のパズルの
ピースを「ごちや混ぜにして、それを無理矢理繋げていつたら一体ど
んな絵が仕上がるだろう。朔が見る悪夢はそれと同じ。意味の繋が
らない夢が幾重にも重なり、最後に、劇の終わりを告げる緞帳が降
りるかのように、真っ暗になる。

おはようの朝をとくにゆきとくにゆき

ああ 悅しき

弟の獨特の目を思い出しながら私は「そこ」と呟いた

和が求めるのは絶妙的な肌術 まるでそんな苦烈な意思が宿るか
のようだ、あの海に似た吸い込まれそうな深い瞳の色。誰かに媚び
ることなど許さない、上目遣いに睨みつける三白眼。その目がリス
のような小さな身体をどれ程大きく見せることか。そしてその目が
語る通り、例え自分が間違つていようともそう易々と折れたりしな
い、そんな意固地な頑固者が、泣きながらしがみつき震えるほどに
怖がる夢。こんなものが？ 朔も意外に可愛い所があるんだな、と
最初聞いた時は拍子抜けだった。けれど今は違う。怖い。何がと言
われても答えようもないのだが、薄気味悪いと言つにはもつと明確
な、気配と言うにはもつと実体の籠つた、霧よりももつと濃く渦巻
くよつな、そんな暗い何かが。

でもそれだけじゃないんだ。この夢は鏡のように私に跳ね返る。

私が一番怖いのは、私。鼻歌まじりにノートに悪夢を刻み込んでいた時、私はどんな顔をしているのだろう。夢を舐るように貪り喰いながら、笑っているんじゃないのか。喜びに満ち溢れて。

「心配だねえ」

誰のことを心配と言つただろう。過剰なほどに私の心が反応した。瘡蓋だ。またあの感覚が蘇つた。そういうことかと理解したら、私の心は鬱蒼と茂る森の住人になつっていた。

「私つて嫌な女」

はあ？ おばあは間抜けな声を上げ、ふつと吹出した。

「ちょこつと傷ついた」まあ、こんな形じゃ仕方ないけど。

「ああ、『じめんよ』でもどうしてそんなことを？」

「うん、と力ない返事をして、私はおばあから目を逸らした。

「テレビドラマでね、凄く嫌な女の子がいるの。とても綺麗な女子で、何時も男の子にちやほやされてて、でも物凄く性格が悪くて、絶対にヒロインになれない女の子。その子は主人公の男の子と付き合つてたんだけど、飽きてしまつてこつと酷くふるの。『私は彼方のことなんて直ぐに忘れてしまふけど、彼方は私のことをずっと覚えていて』って。私はその子にそつくり」

逸らした目はまたおばあへと戻つた。何も言わず、ただじつと見つめてくるおばあに私は精一杯手を伸ばす。けれど、その手は小さすぎて虚しく空を掴んだ。

「おばあのことが好き。優しくて強くて綺麗でお金持ちで、私が欲しいものを全部持つてる、そんな眩しいおばあが好き。誰にも渡しあたくない。ずっと私だけのおばあであつて欲しい」

おばあは柔らかく私の手を包み込んでくれた。けれど、私は首を振る。

「でもおばあだけじゃないの。メグにも朔にも、うつん、誰にでも、私は誰かの一番でありたい。誰かにとつての特別でありたい。でも私はからっぽで、何も返せない。私は無力で、その癖我がままで、嫌な女だ」

言つんじやなかつた。後悔が込み上げた。怖かつた。おばあに嫌われてしまつたらどうしようと。嫌われてしまつたら、私はもう此処にはいられない。それどころかこの瞬間にさえきつと消えてしまう。考えれば考えるほど後悔は込み上げ、視界はぼやけた。

「馬鹿な子だねえ。自分のことを嫌な女だなんて言つもんじやないよ」

おばあは指先を頬から目元へとなぞりながら私を諭した。

「だつて馬鹿だもん」

一応自覚してゐるんだねえ。何気にやんわりきつこことを言つて、

おばあはくすりと笑つた。

「卵が先か雌鳥が先か」

?

「お嬢ちゃんを好きな人達はお嬢ちゃんに何かを求めたりしたかねえ。お嬢ちゃんはお嬢ちゃんを好いてしてくれる人達に何かを求めたりしたのかねえ。そうじやないんじやないかい？ お嬢ちゃんがお嬢ちゃんを好きな人達に何かしたいと思うのと同じように、お嬢ちゃんが好きな人達はお嬢ちゃんに何かをしてくれるんじゃないのかねえ。 そういう思いが連なり輪になつて、どっちが先でどっちが後だつたか分からなくなつて、ただそれだけのことだと思つがねえ」

・・・・・こんがらがつてきた。

「もしかしてわざと言つてる？」

「何がだい？」

悪戯つ子みみたいにおばあは笑つた。

「何時の世も我がままは女の常さ。そしてそれを許してくれる男だけが花を掴むのさ。まあこれは違う話だけどねえ、ようはそれくらい気にする必要はないってことさ。それより、人の為に何かをしてあげたい、その心を大切にすればいいのさ」

大切にするつてなんだろう。胸の中でただ暖めておけば良いってことなんだろうか。だったら、形にするには容易くなく、言葉にす

れば白けてしまいそうなこの思ひは、どうすれば伝わらるんだろう。私には分からぬ。

「私はおばあに何が出来る？　何をしたりいいの？　おばあは何をして欲しい？」

なにも、とおばあは首を竦めた。やっぱり私が小さすぎるからだ。だからおばあは私が何も出来ないと思つてゐるんだ。

「違うのおばあ。本当はこんなんじゃない。本当の私はもつと不意に人差し指が唇に触れた。おばあは首を振つた。寂しそうに、悲しそうに微笑んで。

「・・・・・」「めんなさい」

何時だっておばあは正しい。何時だっておばあは間違わない。何時だって間違うのは私。何も分かつてないのも私。すっかり冷えて不味くなつてしまつたおかしを、私は黙つてじつと見つめ続けていた。

8・暗黙（後書き）

大修正をかましてしまいました。どうもすいません。これからはある程度書き溜めてじゅします。それではまた来月に。

9・インスピレーション

目が覚めたら見慣れた部屋にいた。机と本棚とベッド、仕事部屋みたいな華も色気もない私の部屋に。

丁度目覚ましが鳴った。もぞもぞとベッドから身体を起こして時計を止めると、先日磨き上げたばかりのフローリングの床に素足を下ろした。冷たい感触が心地いい。パジャマの裾をまくり膝小僧の擦り傷を探したけれど、痕跡すらもなかつた。

「そりやそりや」

でも夢じやない。この足に伝わる冷たさと同じ。あれは余りに現実味がありすぎる。そもそも、私は夢を見ない。

略夢。夢を見ない私が見る、夢のような、けれども夢じやない何か。一々そう呼ぶのは長つたらしいから、略夢。朔が悪夢を見た明くる夜、必ずといっていいほど落ちるそれが一体何であるのか、歳の離れた妹に右往左往させられる情けない私に分かるはずもない。ないんだけど、ただひたすら居心地のいい場所なのは確か。目を覚ます度に涙と鼻水でぐずぐずになつているのが玉に瑕だけれど。恋しいのかもしね。

部屋を出て顔を洗い、冷蔵庫の中身と睨めっこして朝食とお弁当のおかずを作つていたら、ふとそんなことを思つた。背後のリビングに置かれたテレビからは朝のニュースが流れついて、陰惨な事件ばかり読み上げられている。世を覆う灰色の雲のなんと暗く厚いことか。せつかく空氣の澄んだ爽やかな朝なのに、水面に口を突き出してパクパクさせている酸欠寸前の金魚にでもなつたかのような気分にさせられる。クリック一つで女の子の身体の構造から爆弾の作り方まで、いとも簡単に分かるようになつたけれど、宇宙に飛び出して星を駆け巡る未来予想図にはまだ程遠く、なのに人口も資源も科学も経済も頭打ちで、未来は先行き不透明。

お弁当の端に添えようと、まだ湯気のたつプロテイナーを摘む手

をぴたりと止めた。なんでもまた私はお弁当に彩り良くおかずを飾つていくという楽しい作業中に、『ラムニスト』でもなったかのように戦慄を嘆いているのでしょうか？

「あひり

取り落としたプロッシコリーを床から拾い上げて水で洗つていたら、階段から軽い足音が聞こえてきた。なんか色々と面倒になつてしまつたので、プロッシコリーを口に放り込んだ。しゃくしゃくと甘く青臭い味を楽しみながら食器洗浄機から茶碗を取り出し、テーブルに並べはじめたら、リビングにふらりと朝がやって来た。

「おはよう

「よー」

それなんて掛け声？ だらりと上げた手はがつくりと手首が曲がつていた。髪はボサボサで、目はとろんと虚ろ、口は半開き。朝に弱い朝だけど、こりやまた輪を掛けて酷い。

「先に顔洗つてきたり？」

「いい。」¹⁾飯を食べてから顔を洗つて歯を磨いた方が合理的だもんだもん？ 聞かなかつたことにしよう。合理的？ それはばほらと言つうんです。多分、まだ味わつていていんだけれどな。微睡みの時を。

テーブルに朝ごはんを並べる。何時も通り一人きりの朝ごはん。じゃがいもと玉ねぎの味噌汁を啜り、それから醤油に手を伸ばして思つた。何であれ、救いがあるつてのは良いことだなど。例えばほら、向かいに座る何時もは小憎らしい女の子。頭はふらふらふらふらと、今でも何処か夢心地。醤油もかけずに冷奴に箸を伸ばし、摘まんで口に運んだ途端、弾けたように零れる笑顔なんてのも……

「おい、そんなに醤油をかけるな。豆腐が死ぬだろう
死なないよ、豆腐なんだから。

* * * *

自転車に乗つて何時も通り堤防沿いの道を辿る。桜並木の向こうの空は青く、陽射は穏やか。カーキチョックのスカートに悪戯する風と戯れながら学校へと向かう。昨日と同じ朝を繰り返しているような錯覚。勿論そんなはずはなくて、茶色く濁っていた川も今朝にはすっかり元に戻り、水面はきらきらと輝いていた。昨日よりもずっと完璧な朝。なのに、今度は私が違う。制服が可愛すぎて私には似合わないじゃないか、なんて訳の分からぬことで八つ当たりしている。

略夢から帰る間際、おばあが一つ困った頼み事をしてきた。

海と山と町と庭と。全でが手に取るより見渡せるあの部屋。その続きの間から私は帰るのだけれど、襖を開いた先の眩しい程の光に足を踏み入れる前におばあは言った。

「例のノートを持ってきておくれ」と。

まったく、私は何にを考えていたんだろ？。いや、ただそうやって頼まれたことに大喜びで、結局は何も考えてなかつたんだけど。

「分かった」と一つ返事で引き受け、そして今更になって気付いたわけだ。どうしたらあの世界に物を持ち込むことが出来るんだ？

と。

略夢がなんであるのか。夢じやない、かと言つて現実でもない。私が分かっているのはそれだけ。正体不明のそんな所に物を持ち込むなんて出来るんだろうか。そもそも、私に「なにも」と言つたおばあがどうしてそんな頼み事をしたんだろう。あのノートはそんなに必要な物なんだろうか。

スカートを手で押さえ、かくりかくりと首を傾げて自転車を漕ぐ私はさぞ氣味悪かつたろう。気付いたら何時の間にか学校の校門を通り抜け、我がクラスの戸を引いていた。すると、お馬鹿と目がつた。

「おはよつマコ愛してる宿題見せて」

ネコ缶開けたらまつしぐら。メグが跳ねるように突進してきた。

毎度毎度朝っぱらからよく飽きもせずに愛の無いの告白をしてくる

もんだ。宿題が懸かってるだけに必死なのも分かるんだけど、分からぬだけに心にちつとも響かない、と言つかムカツク。構うのがどうにも鬱陶しくてひらりと避けたら、勢いが付き過ぎたお調子者はそのまま床と激突しそうになつた。慌てて抱きとめたら、社交ダンスの決めポーズみたいになつてしまつた。皆から冷やかしと拍手を頂く程の。

「なに、今日のマコとつても大胆」

「頬を染めるな気持ち悪い」

メグはぐりぐりした大きな目を細めた。訝しげな顔で私に尋ねる。

「マコ、もしかしてなんかあつた?」

「え、どうしてそう思うの?」

ドキッとした。尋ね返したら、メグは首を傾げて、

「うーん、何となく」

「何となくで人の内側を浚うのは止めてくれ

「当てずっぽ当てずっぽ!」

それにしては恐ろしい程の的中率を誇るのだから困る。しかも自覚してないのだから始末が悪い。

小柄で可愛らしくてちょっとエな体で、おまけにちょっと頭が足らなそうで。軽薄な男達に何かと腹の立つ勘違いをされやすいメグ。けれどそれは大間違い。この子に嘘や見栄は通用しない。驚くほど人や物の本質をしつかり捉えている。私は見た。彼女に言い寄ったそんな男達の末路を。端的に、ぐつさりと、再起不能に。死屍累々。恐ろしい、ああ恐ろしい、恐ろしい。実はメグの額には人の心さえも見通す千里眼があつたとしても、私はちつとも驚かない。

もつとも、それを上手く使いこなせるかどうかは別の話だけれど。「なに、この頭を撫てる手は。なんか凄く馬鹿にされてる気がするんですけど」

言葉と表情がまるで合つてない。私はもう、あなたのそういう所が堪らない。

千里眼ねえ・・・・・

「ねえ、メグ」

「なあに?」

「この学校にオカ研つてあつたよね」

ゴロゴロ言う猫みたいなメグの顔が見る見る変わっていった。まるでカルピスの原液でも一気飲みさせられたみたいな顔へと。

ま

つがえた矢は放たれる為にある。軋むほどに引き絞られた弦から放たれる矢は、風を切つ裂き的を射抜く。その矢が例え自分を射抜く凶器に変わつたとしても、一度手から放たれた矢は決して戻らない。じゃあその愚を犯さない為にはどうすればいい？ 簡単だ。矢をつがえなればいい。ただそれだけの事。

「どつたの、弓道場なんかぼーっと眺めて」

脇からひょいと顔を出してメグがそう尋ねてきた。

「後悔のない生き方つて案外つまんないのかなあ、なんて思っちゃつたりなんちやつたりして」

「はあ？」

黄昏てみたかっただけです。スマセン。

放課後、校舎と二階建てのプレハブ小屋を結ぶ渡り廊下を、私とメグは歩いていた。五階建ての鉄筋コンクリートの建物が七つだったか八つだったかある我が家にしては珍しい木造の廊下で、壁はなく剥き出しの地面にはスノコが敷かれていた。グラウンドから吹き抜けの風は砂を纏う。板の上を歩く度にじやりじやりと小気味良い音が鳴つた。

「なんか本当に扱い方がどうでもいいって感じだね」

「実際どうでもいいよあんな所」

知り合いだろうか。ランニングをしている野球部の男の子達に手を振り返しながら、メグはバッサリとそう斬り捨てた。あんな所。私は追いやられたようにフェンス際に建つプレハブ小屋を眺めた。建物は殆どが校舎の影に隠れ薄暗く、今にも倒れそうだつた。壁に張られた補強の大きなプレスが役に立つてるよう見えない。学校からも生徒達からも相手にされず、それでも懸命に活動を続ける弱小部が集う、通称『墓場』と呼ばれている所。なんて酷い言われようだと思っていたけれど、そんな雰囲気十分醸し出している。

「ねえマコ、やつぱり行くの辞めない？」

メグは振り返ると、今更になつてそんな事を言い出した。目的のオカルト研究部はもう田の前だつていうのに。しかも朝から何回も何回も同じ台詞を繰り返しているんだから、いい加減呆れてしまつ。

「だ・か・ら、一人で行くからメグは部活に出ろつてば」

「だ・か・ら、そういう訳にはいかないんだつてば。だつてあいつは変態だよ？ マコが一人で行つたら何されるかわかんないよ」

変態ねえ。他ならぬメグがそう言うのなら、間違いなくそいつはご愁傷様な変態なんだろうけど、どうもメグの態度が気に懸かる。突つ憚食と言つか。口ぶりや、わざわざ休み時間を潰して渡りを着けてくた辺り、知り合いなのは間違いないようなんだけど、過去にその変態と何かあつたんだろうか。

「もしかして朔になんかあつた？」

聞こいつとしたら先に聞かれてしまつた。そして結構痛い所を突いてくる。

「どうしてそう思うの？」

「だつて人見知りで小心者のマコが暴走する時は、何時も朔になんかあつた時じゃない」

「ああ、なるほどなー」

弁明のしようもないほど心当たりがあるのが困る。だつたら、私は今暴走してるんだろうか？ 家事に育児に略夢に悪夢、その上期末テストは目の前で、これ以上何かを抱え込む余裕はなかつた。特に今回は赤点は持つての外だし。もっとも、そんなボーダーは何時も余裕でクリアしているんだけれど、私は石橋を叩いて誰かに渡らせるくちだ。つまり万全を期して望みたい。だから略夢に物を持つていく方法を誰かに調べてもらおうと思つたんだけど……。やっぱり安易すぎるだろうか。大体どうやって説明したらいいんだろう。誰かに話してもいいものなんだろうか。結構なんにも考えてないな、私。

「おーい

「んあ？」

「だから朝になんかあつたの？」

「違う違う。あつたのは私」

メグの大きな目がきらきらと輝きだした。

「なに、それどんな事件！？」

始まつた。最近大人しいなと思つていたら、形を潜めていただけだつたか。

「君は相変わらず何でも事件に仕立てたいらしいね」

「失礼なこと言つな。私が事件に仕立ててるんじゃない。事件が私に仕立ててるんだ」

「意味が分からん」

「ようは美少女には事件がよく似合ひつゝことだよ」

「退屈なんでしょう、ようは……」

「」の物騒な考え方、どうにかならんものか。

* * * *

私はメグを冷たくあしらいながらも、実はメグの首に見えない鎖を掛けて引きずり回していたのかもしれない。もしくは目の前にメグが如何にも好きそうな煮干を吊り下げる、そつやつて保険を掛けっていたのかもしれない。勿論そんなつもりはさらさら無かつたんだけど、もしそうだったとしたら、そうしておいて良かつたな、とプレハブ小屋に一歩足を踏み入れて思つた。中は暗く埃っぽくて、やたら静かで、どうにも薄気味悪かつたからだ。この上「変態」の二文字が付き纏うんだから、一人でここに来ていたらきっと引き返していただろう。

「じつち

腕を引っ張りメグは私を促すと、一足早く入り口側の錆びた鉄階段を軽快な音を立てて上りだした。迷いない足取りは奥へ奥へと向かっていく。私はその後を黙つて付いて行く。幾つかの部屋の前を

通り過ぎ、一番奥隅の部屋の前でメグは足を止めると、チッと舌打ちを零した。

「あいつ、部員なんかいらないって言つてたのに」

引き戸にはえらく達筆な字で『部員募集』と書かれた張り紙がしてあった。この人気のない小屋を見れば張り紙の効果の程が窺い知れる。ノックのつもりか、メグは戸に軽く蹴りを入れ、それから三秒も待たずに勢い良く戸を開いた。

「なんだここ」

裏切られたと思った。墓場とオカ研、ベストマッチの組み合わせ。おまけにその主は変態ときてる。そりや部屋の中は怪しそ満点で、いつそ乾杯してやりたいくらいドロドロのぐつちやぐちやな所だと思っていたのに、六畳程の長細い部屋は小奇麗に片付いたモデルルームのようだった。

床は灰色の毛並みの長い絨毯が敷かれていて、緑と黄色の縞模様のカーテンが揺れる窓際には、籠で出来た高価そうな応接セットが備えられていた。部屋の奥隅にはスチールの本棚が一つ、それぞれ向かい合せに並んでいる。その合間ににはすっぽりと白いシーツが敷かれた小さなベッドが埋まっていた。そしてその上には、長い足を器用に折りたたんだ男の子が読みかけの本を胸に抱いて眠りこけていた。

づかづかとメグは土足のまま部屋に上がり込んだ。男の子の前に立つと、「起きろ」と低い声で唸り、またも乱暴にベッド蹴りを入れる。ドスッ、と柔らかい物がめり込むような音がした。男の子は穏やかな笑みを浮かべたままぴくりともしない。気持ち良さそうに寝息を立てている。

「起きろつてば！」

メグは耳元でそう怒鳴った。胸の上で規則正しく上下していた本がぴたりと止まった。男の子は長い呻き声を出しながらゆっくりと身体を起こした。

「やあ、おはよう愛琉」

「おはよう。あんた、どうして私達がここに居るか分かってる?」

「私達?」

眠たげな横顔がすっ、と入り口で立ち尽くす私に向いた。男の子は一瞬固まって、それから私に軽く頭を下げた。「どうも」と、私も頭を下げる返した。男の子はメグに向き直り、寝癖の付いたぼさぼさの髪を搔きながら呟いた。

「なんだっけ?」

「お前なあ!」

掘み掛からんばかりの勢いでメグが怒鳴り散らした。男の子は欠伸を一つすると、

「うそつせ。ちゃんと覚えてるつてば」

と、涼しい程の笑顔でメグの腰の辺りをポンポンと叩いた。

私は一人のやり取りを黙つて見つめていた。息を殺し、空気のようになりなく透明になることに勤めながら。そうしなければ一人の邪魔をしてしまいそうで。私の知らないメグと私の知らない男の子。どうにも居心地が悪いなと思っていた。

なんとなく面白くない。

東方愛琉。彼女と出会つてから一年余り。私は誰より側でメグを見てきた。授業中は寝てる、宿題はやつてこない、テストは赤点だらけ、なのになんちつとも堪えない。拳句に教室の真ん中で男の子達と大声で口にするには憚られる話題で一緒になつて盛り上がるし。だからといってがさつでもなくて、しつかり女の子らしい所も押さえている。彼女はちょっとずるい。

何も隠さない何も着飾らない。誰にだつてどんな時だつて在りのままで居続けられる、そんな彼女だから、私はメグのことだつたら何でも知つてると、何処かでそう思つていたのかもしね。けれど私の前には、今まで見たことのないメグがいた。テニスをしている時の怖いほど真剣な姿への変わり様とも又違つた。物に当たり、眉を吊り上げ大声で怒鳴る、そんなの今まで見せてくれたことがない。余程嫌いなんだろうか。へらへら笑いながらのらりくらりとかわす、細い身体をしたトロロテンみたい彼が。ううん、違う。メグは嫌いなものには道端に転がる空き缶程度の扱いしかしない。うーん、どうやら私は弄ばれてしまつたらしい。

「愛琉」

彼は突然立ち上がると、食つて掛かるメグの肩に手をかけた。笑顔は消えていた。メグの名を呼んだそれには、真剣で何処か甘つたるい響きが籠つていた。メグは黙つて彼の顔を見上げていた。濃厚なラブシーンでも始まりそうな雰囲気にドキドキしていたら、彼はそのままメグの傍らを通り過ぎ、私の所へ歩み寄ってきた。

大きい。少したじろいでしまつた。私より大きい男の子なんてざらにいるけれど、意外だったのだ。線が細くて小さそうな印象があつたから。私の目線より少し上に、細いハの字の目。まだ寝ぼけてるのかと思つたらこれが何時もの彼のようだ。

「初めまして、かな。兼巻 司です」

彼、兼巻君はにこりと笑いながら右手を差し出してきた。自己紹介で握手を求めてくる奴なんて初めてみた。でも悪い気はない。私も自分の名前を名乗ると、彼の手に手を合わせた。その途端、この世の終わりを叫ぶような悲鳴が上がった。

「マコが男の手握ってる……」

あ。

すっかり忘れてた。あんまり自然に手が差し出されたから思わず握ってしまった。そう言えば私は男の子に触れないんだった。触ると鳥肌が立つて足元からぐらぐらになるから。でも、なんとも無い。気分も悪くない。まさか治ったんだろうか。兼巻君の手をべたべた触りながら考え込んでいたら、横から手を払われ、思いっきり腕を引っ張られた。

「これは私んだ！」

腕にしがみつき、メグは兼巻君を睨みつけてそう叫んだ。いや、私はどちらの物にもなった覚えはないんだけど。

「噂通り仲が良いんだね」

くすりと笑い、兼巻君は少し痛そうに手を振つて歩き出した。二脚あるゆつたりとした椅子の一つに深々と腰掛け、私に向かつて「どうぞ」と席を薦める。

「噂？」と、私も椅子に腰掛け尋ねた。

「君達は有名人ってこと」

そりやお耳汚しを。又候どうせろくな噂じゃないな。しかし一千人から生徒がいるこの学校で有名人ってなんだそれ。メグはまだ分かるけど、私は何も無茶した覚えなんか

「つて、なんで私の上に座つてる」

さも当たり前のように私の膝の上にメグがいた。「私の座る椅子がないから」と、首に両手を回し甘えてくる。気持ち悪い。「壁の花にでもなつてりやいいだろうが」と押しのけていたら、兼巻君が立ち上がった。

「じゃあ愛琉はここ座りなよ」

そういう問題じゃない。頭くらくらしてきた。

「いいから兼巻君はそこに座つて。メグ、空氣読め。出でけ」

「なに、そんなに私が邪魔なの!? そんなにそいつと一入りになりたいの!? 私じゃダメなの!?!?」

メグは涙ぐむ振りをして、よよとしな垂れ掛かった。

「五月蠅い！ それはこっちの台詞だ。この浮氣者め！」

「違うわ！ それは誤解よ！」

「なんか僕お邪魔みたいだから席外そつか？」

……なにこのコント。私、乗せられた?

「分かつた、分かつたよ。私が悪かつた。全面的に譲歩する」確かに私はそう言つた。言わないと収まりがつきそうになかったから。けれど、どう考えたってやっぱり理不尽だと思う。私は一応乙女だ。なぜ乙女が乙女をお姫さま抱っこしなけりやならんのだ。

* * * *

身体を包み込むように作られた大きな籐の椅子はなかなか座り心地がよかつた。メグさえいなければ。この子は見た目ちっこい体でも、テニスで鍛えこまれてるから結構重い。頭の中までとは言わないうが、少なくとも大きい胸の半分くらいは筋肉で出来てると思う。いいや、これは決して私のやつかみなんかじやない。

「ここ、素敵な部室だね」

そう話しかけた兼巻君は、まるで雑誌に出てくるモデルのような仕草をしていた。長い足を組み、両手をお腹の上に重ね、深々と背もたれに身体を預けている。笑みを絶やさない柔らかな物腰もそうだけど、どう見ても彼は人が言つ『一般的な変態』とは対極にいる気がした。

兼巻君は首を竦めた。

「そう言つてもらえると嬉しいな。苦労した甲斐があつたよ

「苦労つて？」

「ここに在る物の大半が貰い物とか捨い物なんだ。この応接セットだつてそう。こんな新しくて立派な物が学校の側のゴミ置き場に捨てられてたんだ。経済大国日本万歳！」って感じだね

死ぬまでに一度は何時か食べてみたい 焼きたてパンにマーマレードの朝ごはん（字余り）

表情こそ穏健そのものだつたけど、兼巻君の口調には私が憧れて止まない朝食のような、それでいてちつとも甘くない皮肉がたっぷりと塗りたくられているようだつた。変態かどうかは知らない。けれど、どうもこいつはいけない。能面が貼り付いたようなこの笑顔、腹の中で何考へてゐるのか分かつたもんじゃない。朝の北町通りのラッショで何時も聞く、信号を右折待ちの車が後ろから来た路面電車に鳴らされる警笛みたいな音が、私の頭の中を駆け巡つた。そんな疑心暗鬼の中、兼巻君は私に尋ねた。

「なんか僕に用があるそつだけど、なに？」

「うん、ちょっと相談事と言つか、頼みたいことがあつたんだけど……」

そう言い掛けて、私は考え込む。果たして彼に話してもいいものなんだろうか。勿論メグにも。特にメグなんて野次馬根性で私の膝の上に座つてるとしか思えない。

「そんなに見つめないで。恥ずかしい……」

「うん、間違いない。」

大体、調べるにしたつてどうやつて調べるというんだ。例えばこの学校的図書館が、アカシッククレーラード的なとんでもなく素晴らしい図書館だつたとしよう。だったら『略夢に物を持つて行く方法』なんものが調べて出てきたりするだろうか。出てくるはずがない。略夢の存在定義は私の中にしかなく、しかもその定義さえ全くあやふやな物なのだから。

「ごめん、やっぱり辞めとく」

「ええー、なんだそれ。期待してたのに」

メグがブーイングを飛ばした。いや、もつともです。私はぺこりと頭を下げる。兼巻君が身を乗り出してきた。

「わざわざこんな所まで来たってことは、そっちの方の話なんだろう。自分で言うのもなんだけど、僕はその手のことは良い相談相手になれると思うよ」

「それは私からも保証する」

さつと手を上げて、メグがすかさずフォローを入れた。この変態には勿体無い嫁さんだなと思いながら、私は一人に向かつてこくりと首を振った。

「うん。私もその辺りは信じてる」

こんな所で、おそらく一人で活動を続けてるんだ。狂氣じみた執着があるからこそだらう。でも

「なんか弱みを見せるようでヤダ」

兼巻君はぽかーんと口を開いて固まつた。それから「君らしいね」と大声で笑い出した。

「壊れた？」

「壊れた」

何がそんなに可笑しいんだろう。何時までも笑い続ける兼巻君を私達は気持ち遠巻きに眺めていた。

「しかし参ったな」

ようやく笑うのを止めた兼巻君は深刻そうに頭を抱え込んでそつづぶやいた。ちらりと手の隙間から私を見ながら。

「何が参ったの？」

「いや、だつたら僕も君に頼み事をしようと思つたんだけど……」「どんな？」

突然、ふつ、と耳に息を吹き掛けられた。ぞわりときた。私はにやにやと笑っているメグを睨みつけた。

「あーあ、聞いたやつた。知らないぞー。私があんなに警告したのに。後悔するぞー」

「だつて如何にも構つてくださいって素振りしてたじやない」

分かつてないとばかりにメグは首を振る。

「それが何時もの手なんだぞー。あいつは目的の為なら手段を選ばない男だぞー。きっと魂だつて既に悪魔に売り渡してるぞー」「まるでファウストだね。でも確かにそんな感じするよ」

「だぞー。マコみたいなお人よしはばらんばらんにされて肉屋に叩き売られちゃうぞー。1ブロック198円だぞー」「文字通り随分と安い女なんだな、私」

兼巻君が「コホン」と咳払いをした。

「君達や、そういうのは僕の聞こえない所でするべき話だと思つよ」すっかり見慣れてしまった笑顔は消えていた。細い糸のような目が幾分大きく開き、黒い瞳孔がじっと私を見つめている。まるで私の一拳手一投足を伺うように。ポケットの中に押し込められてしまつたような息苦しさに、私は堪らず兼巻君から目を泳がせた。

「麻子」

萎縮して、思わず背筋を伸ばして「はー」と答えてしまった。何故出会つたばかりの変態にファーストネームで呼ばれなければなら

んのか。

「分つてゐると思つたが、『びつじて』と聞いてしまつたからこは僕の話を真剣に最後まで聞いてもらつよ。でも安心して。愛琉はあんなこと言つてるけど、僕が君に頼みたい事はそんな大層なものじゃないから。けれどね、これは僕にとつて切実なことだから。聞くからには必ず答えを出して欲しい。そして出来れば僕の満足のいくようだ。勿論断るのも引き受けのも君の自由だけどね。分かるね？」

何だこの変わり様は。半ば脅してると変わらないじゃないか。私は無言で身を正した。

「ちなみに僕のことは『司』と呼んでくれたらいい」

……調子に乗んな。

「僕が頼みたい事、それは」

と、空気を読まない女、メグが横槍を入れてきた。

「言つとくけど血は駄目だかんね」

「血…？ 突然こいつは何を言い出すんだ！？」

「血はおろか、髪の毛一本までマコは私のものなんだから」

メグの唇が私の首筋に迫つた。はしごとその口を手で塞いで、私はメグの耳元に囁いてやつた。

「心臓に杭打ち込んだらか」

「ふおめんなふさい」

テニス焼けした健康的な吸血鬼なんていてたまるもんか。

兼巻君は苦笑いを浮かべ、「それは残念」と首を竦めると席を立ち、本棚の方へと歩いていった。

* * * *

兼巻君はベッドに膝掛け、本棚を漁っている。

「何処にやつたかなあ。使わないと思つたんだけどなあ」とか、

「あいつら滅茶苦茶やつてくれるよ」とか、ぶつぶつ文句を言ひながら。

一体何がしたいのやら、何をやらせたいやら。考えると不安で嫌になってきた。もう一つその隙に逃げ出してしやろうか？

……高確率で『麻子』と名付けられた藁人形に、五寸釘ゴッスンゴッスン打ち込まれそうだ。第一、この重しが邪魔で動けない。こんなことなら、メグの忠告にもつと耳を傾けておけばよかつた。

そう後悔する私の前に、兼巻君が「お待たせ」と姿を現した。手に薄っぺらい紙を持つて。

「はい、これが僕の頼み事」

何だらう。私はガラステーブルに置かれた紙に腕を伸ばした。が、その前にメグが素早く立ち上がりそれを搔つ攫つていった。

「うーん？」

メグは難しい顔をして紙を見ながら唸ると、一転して兼巻君に向かつて「ふーん」とにやりと笑つて、私に用紙を手渡した。何だあの笑顔、気味悪いな。私は手にした紙に目をやつた。

「……入部届け」

「そうだよ。もしかしてクトゥルフ神話について熱く語り明かしたいとか、『コールド・リー・ディング』と一緒にマスターしてみないかとか、チュパカブラ探しの旅についてきて欲しいとか、僕と結婚してくれだとか、そんなの期待してた？ 残念だったね。クラスと名前と住所と連絡先、あ、そういう。3サイズも忘れずに」

取り敢えずこいつとは命一杯話し合いをして絶縁した方がよさそうだ。まあ、それは何時か暇がある時に回すとして、あれだけ脅すようなことを言つておいて、頼みたい事つてのはこの程度のことだつたのか。拍子抜けしてしまったその一方で、困ったなど私は思つた。彼の頼み事が、クトゥルフ神話やらコールド・リー・ディングやらチュパカブラやらプロポーズやらムー大陸やらだつた方がどれ程ましだつたろう。何の遠慮もなしに「嫌だ」の一言で断れたらうから。しかし入部届けとは……。

兼巻君は頭を搔いた。

「いや、参ったよ。今まで部員が三人いれば部として存続出来たん

だけどさ、急にそれが五人になつてね。急遽あと一人集めなきやらなくなつてさ。しかも九月頭までだつて言つんだよ。学校は余程このフレハブ小屋潰したいらしい。部員からも話が違つて責められるしや。いや、ホント参つた参つた

本当に参つているのだろうか。愚痴を零すにしてはやたら明るい声と笑顔だ。そんな彼に数段声のトーンを落としてメグは尋ねた。

「で、その口ばっかり達者な部員は何処で何をしてるんだ」

「さあ」と兼巻君は首を傾げる。

「何処かその辺りのゲーセンにでもいるんじゃない。元々授業サボるのに都合が善いからって名前貸してくれただけの奴らだし」

「はあ……、呆れた。からかう気くなつちつたよ。残念だけ同、その願いは叶わないよ」

「そうなの?」

私は「うん」と首を振つた。

「うち、両親いないし、小さい妹の面倒」

「もうね、それがめちゃくちゃ可愛いんだよー。つやつやでせ、すべすべでさ、そんでふわふわで。小生意氣なのがまたもーー。あー、思つ存分もふもふしたいー」

興奮してすつ飛んできてでかい胸を擦り付けてみるとこりスイマセン。最近は可愛くないんです。

「何だい、そんなことか。それだったら何の問題もないよ。別に部活に出るなんて言つ氣ないし。ただ名前を貸して欲しいだけだから。いや良かつた良かつた。これで問題解決。この部は救われた。めでたいめでたい」

兼巻君はパンと手を叩いた。

「ちょっと待つた!」

押しのけようとしていた私を逆に押しのけるようにしてメグは立ち上がると、兼巻君を睨み付け、テーブルに左手をバン!と叩き付けた。

「マコはまだ入るなんて一言も口にしてないだらう。第一、お前の

その計算奇怪しくないか？ まさか私も計算の内に入れてやしないだろうな

「何言つてゐんだよ。勿論入つてるよ」

事も無げに兼巻君はそう答えた。メグが声を張り上げる。

「なぜそうなる！ 私はテニス部だろうが！ お前私からテニスを奪おうつか!? 私からテニス取つたら何が残ると思つてんだ。この美貌しか残らないだろうが！」

「それだけ残れば十分だろう。まったく、厚かましいな愛琉は。それに大丈夫だよ。調べたらうちの学校は部の掛け持ちOKなんだってさ。良かつたね。大好きな麻子と一緒に部活だよ。僕には見える。この入部を切つ掛けに二人が辿り着く輝かしい明日、祝福のバージンロードが」

「……そんな分けないだろ？」

何だ、今の一瞬の間は。

「あとで入部届け渡すから、必要なこと明記して持つてきてよ。それと3サイズはもう知ってるからいらないよ」

「なんで知つてるんだよ！」

エンドレス。放つておいたらこの一人は骨になるまでこんな言い合いでしていそうだ。私は手を上げて言った。

「入部する

「はあ？」

「だから入部する。名前貸すだけでいいんでしょ。困つてるみたいだし、それくらいだつたら私も別に構わないから」

「ダメだよマコ。お天道様に顔向け出来ないようなことはしちゃいけないつてお爺ちゃんお婆ちゃんに習わなかつたの？ マコの綺麗な履歴に煙草押し付けてひつて払つたみたいな真つ黒い染みが出来ちゃうよんだよ？ 汚れちゃうんだよ？ もう取れないんだよ？」

メグは私の肩を揺さぶり必死に引止めにかかりました。たかが部活の入部に酷い言い様だ。何処かの宗教や市民団体に入る分けでもあるまいし。

と、

「認めない」

強い口調で兼巻君がそう言つた。ぶるぶると肩を揺すつていたメグの手が止まつた。私達は異口同音に「はあ?」と兼巻君に顔を向けた。

「だから麻子。君の入部は認められない」

「……司、お前一体何がしたいんだよ」

全く持つて同感だつた。それにしてもメグを呆れさせるとは大したものである。

兼巻君は私に尋ねた。

「君は無償の愛つて信じる

一瞬おばあの顔が浮かんだ。私は

「信じる

と首を振つていた。

「君は素晴らしい人だね。いや皮肉じゃないよ、誉めてるんだ。僕も信じてるよ。親が子供に与える愛情、それだけはね。じゃあそれ以外でそう呼べる関係はあるのかな? ないよ。人は愛したいから愛するんじゃない。愛して欲しいから愛するんだ。そういう思いを互いに差し出し均等に分かち合つて、そやつて支えあって生きるのさ。一方的な好意ならいらない。無償ではなく有償を。それが僕のポリシーなのさ」

「つまり何? 入部したいんだつたら私の頼み事を聞かせろよ、つてこと?」

「御明算」

面倒臭いヤツ。回りくどいし。それにこんな取引つてあるだろうか。瀬戸際外交? 何でこんな上から目線なんだろう。でもどうして腹が立たないんだろう。

「駄目?」

兼巻君は笑つた。今までの張り付けたような笑顔じやなかつた。はにかんだような、少し困ったような、そんな笑顔だつた。本当は

「この人はこんな風に笑う人なんだなと、私はそう思つて首を竦めた。

「分った。じゃあそいつ方向で話を進めよつか」

「成立だね」

差し出された手に手を重ねた。膝に纏わりついたメグが気だるげな欠伸をひとつ漏らした。

13・スポットライト

「夢にはその時抱えていた希望や願望、不安なんかが影響されやすいのは知っているよね」

校舎の影がこの部室にも差し込んでいた。時間が経つのは早い。「一日連続で朝に冷たい日で詰られるのは流石に嫌だ。私は『夢に物を持ち込む方法』を兼巻君に尋ねた。

それを聞いたメグは、子供みたいな事を言つと私を笑つた。人がどんなつもりで『夢』という言葉を使ってるかも知りもしないで。メグの頬をぐにぐにひっぱりながらちらりと兼巻君の表情を伺うと、あの笑顔で私にそう尋ねたのだった。

私は頷きもう一つ付け足した。

「寝ている時、外からの刺激にも影響されやすいうって言つよね」

例えばテレビドラマを見ながら眠つてしまつたら、夢の中で自分がそのドラマに登場していた。似たような体験、誰だつてした事があるだろう。

「そうだね。まるで夢は取り扱いの難しい薬草みたいだ。ちょっとした刺激にすぐに反応してしまうんだから。

ああ、でも小説や映画なんかで夢と現実とが区別付かなくなっちゃう話が結構あるじゃない。あれって実際さ、ドラマやアルコールに頭が犯されているか統合失調症でも患わつてなけりやまず在り得ないよね。ごく全うに生活している至つて健全な人だったら、その境が分からぬなんて事まずないもん。そう考えると薬草つてのは物騒な例えかもね」

統合失調症。

一 定に保つていた私の胸のリズムが狂う。もしかして私は……。

違うと言い切れる自信が私にはまるでなかつた。

私の不安を他所に兼巻君は話を続ける。

「そもそもこの夢ってヤツは一体何なんだろうね。夢は僕達にとつて何がどう必要なものなんだろう」

「必要?」

「そう、必要。指先にトゲが触れてしまつた時、僕達は反射的に手を引っ込めるだろう。そうしなけりゃトゲは皮膚の奥深くに潜り込んでしまつ。この季節になると汗が止め処なく流れてくれるよね。そうしなけりゃ熱中症になつてしまつ。時々邪魔臭くなつてしまつような体の反応。だけど、全て僕達にとつて必要なものだから備わってるんだ。だつたら夢だつてそつなんぢやないのかな。人にとってそれは必要だから僕達は夢を見るんぢやないだろうか」

そんな風に考えたことなんてなかつた。もし私が今でも夢を見続けていたとしたらそんな面白いアプローチを取れたろうか。私は彼に感心しつつ夢の必要性を考えてみることにした。

「……忘れるため」

思い当たる節もあつて、私はそう答えることが出来た。へえ、と兼巻君が身を乗り出してくる。私は何時か見た夢の名残を思い返しながら慎重に言葉を選んだ。

「夢つて中々覚えてられないものだよね。とても綺麗で面白くて、それが夢だと分かつていて、忘れないようにしなきやつて何度も記憶の中に閉じ込めることが出来ない。目覚めたら素敵な夢だつたつて感想だけが残つて、中身はすっかり忘れてしまつている。小さな頃、それが不思議でならなかつた」

兼巻君がこくりと頷く。私はまた話を続ける。

「私達は毎日毎日色んなことを耳にして、色んなことを耳にして、肌に触れて、様々な体験をする。それがさして取り留めの無い体験なら気にも留めないんだけど、もしそれが重要な体験であるなら口の中何度も繰り返すなり、メモを取るなりして記憶しようとする。

つまり情報を選り分けしてゐる。

でも、人はそんなに器用に出来てないんじゃないのかな。私達は情報を選り分けて記憶するなんて事が本当は出来なくて、例えばまったく意味を為さない音や映像の断片すらも、そのままに全部頭の中にインプットしてしまつてゐるんじゃないのかな」

「うーん、と腕組みをして兼巻君は唸ると、

「どうしてそう思つの?」と私に尋ねた。

「夢は色々な影響を受けやすいって言つたでしょ。人は寝ているとき内側を向いてるはずだよね。つまり精神的な所に意識が向いてるはず。なのに外で起きてる事も夢に影響を与えてしまう。これはつまり無意識であつても人は情報を拾い集めてるって事だよね」

「なるほど。裏を返せば意識的に情報の遮断は出来ないって事になるね。じゃあそうやって無意識に拾い集めてしまう情報が、頭の中から簡単に引っ張り出せるものと出せないものに別れてしまうのは何故なんだろう?」

私は俯く。こんな話に参加する気はまったくないのだろう。私の膝に頭を預けて微睡んでいるメグの旋毛に目をやる。かき混ぜるだけかき混ぜていい気なんだ。

「これはイメージなんだけど……」

ウイリアム・スタンリー・ミリガンを知つてる?

私は顔を上げ兼巻君にそう尋ねた。彼は小首を傾げた。

ウイリアム・スタンリー・ミリガン。

1955年2月14日、アメリカ合衆国生まれ。

1977年、3人の女性に対する連續強姦及び、強盗の容疑で逮捕される。

精神鑑定の結果、解離性同一性障害と判明。
通称、ビリー・ミリガン。

「それって『24人のビリー・ミリガン』の?」

「そう。読んだ?」

勿論、と兼巻君は頷いた。どううなと私は思った。如何にも彼の興味を惹きそうな実話ではないか。

解離性同一性障害、いわゆる多重人格障害者だつたビリー・ミリガン。彼の中には年齢も性別も出身国もバラバラな24人の人格が存在していた。

安全な場所にいるときに他の人格たちに対し支配権を持つ『アーサー』。逆に危険な状況の時に支配権を持つ、アドレナリンを自由に操る空手の達人『レイゲン・ヴァダスコヴィニチ』。交渉役の『アレン』。苦痛の管理者『デイヴィッド』。隅の子供『クリステン』……。

「覚えてる? 彼らにはそれぞれ役割があつて、人格を交代すると起きは暗闇を照らす『スポット』と呼ばれる光の中に立つ事で、表に出てくることが出来た。

頭の中から簡単に引っ張り出せる記憶と出せない記憶。その違いはスポットによって見えるか見えないか、ただそれだけの違いなんじゃないのかな。常に光が当たっているスポットには、覚えておきたいことや意味のある記憶が。スポットの外には、どうでもいいことや意味のない記憶があるんじゃないかな」

兼巻君は口を挟まない。糸みたいな目を更に細めて頷くだけだ。私は話を続ける。

「知覚から得た情報の全てが無条件で記憶されてしまうとするなら、何時かはそれを整理しなきゃいけない。じゃないと頭の中がグチャグチャになつてパンクしちゃうだろうから。でも起きている時に整理出来るのはスポットの中の記憶だけだよね。だったら寝ている時ならどうかな。スポットはなくなつていて、暗闇にある記憶も整理

されているんじゃないのかな。そして記憶の整理が夢になつて現れるんじゃないのかな」

夢は大抵無茶で辻褄が合わない。多くの矛盾で溢れている。なのに妙にリアリティがあつて、それが夢だと中々気付かない。それはきっと、意味のある記憶と意味の無い記憶が混ざり合つてゐるからなんだう。

「だつたら夢は忘れる為にあるんじゃなくて、情報を整理する為にあるんじゃないか」

兼巻君の浮かべる微笑がどうにも意地の悪いものに見えた。私は左右に首を振つた。そうじゃない。そうじゃないけれどもうじやない。これはどちらが寄り重要かという問題なんだ。

私は兼巻君に言った。

「忘れるってそんなに簡単ことなのかな？ 嫌な事や辛い事や悲しい事、そんなのを簡単に忘れてしまえたらどんなに幸せだろうね。日々尽きることのない情報を整理していくのは勿論大切なことだけど、でもそれ以上に人は忘れることが大切……、ううん、必要なんじゃないのかな」

こんな時、言葉の限界を感じてしまう。自分の伝えたいことが上手く表現できない。それは自分がまだ言葉を知り足りないからかもしれない。それでも私は私が知る中で、辛抱強く我慢強く言葉を選ぶんだけど、でも何処かでカリカリした苛立ちを隠している。

暫く沈黙が続き、私は我に返つて思わず謝つた。

「ああ、ゴメンね。单なる私の適当な意見だから。適当に聞き流しておいて。うん」

「何いつてるんだよ。いいよ、凄く良い。その調子でどんどん行こ

う

兼巻君は幾分早口にそう言いながら何度も頷いた。興奮してゐるようだつた。

困つた事になつてしまつた。

う

促されるまま、私は兼巻君の質問に答える……。

「じゃあ、そうやって忘れてしまった夢は何処へ消えて行くんだ
うひ。スポットの外、暗い片隅にでも追いやられてしまうのかな」
また兼巻君が奇怪なことを聞いてくる。口調は少し早口で、細か
な震えさえはらんでいるようだった。

やつと同士に出会えた！ そう言わんばかりの熱を感じた。けれど彼が期待を込めて私を目つめる程に、私は - 273 · 15 の世界に放り込まれた気分になつた。そうなると面白いもので、今までフィルターを被せたような狭い視界の中にいたことに気付く。どんどん視野が広がっていく。……まあ、簡単に言つて恥ずかしくて堪らなくなつたわけだ。

こいつ私以上に友達いなさそうだな。

我ながら恐ろしい程に冷めた目で彼をそう評しながら、投げやりに私は答えた。

「例えば部屋に幕をかけるじゃない。ちりとつで『ミミ』を掬つじゃない

い

「ああ

「そうすると掬いきれない埃が線を引いてちょっとだけ残る。あれイライラするんだけど」

「あー、まあ、分かるよ。うん」

「そういう時私は変なところで物ぐさだから、埃を物の陰に追いやつたりしちゃう。じゃあこれは果たして『ミミ』を捨てたことになるんでしょうか？」

「ならないね」

「でしょう。そういうことだよ」

私はメグの頭に手を伸ばし絹の糸みたいな柔らかくて豊かな髪を梳く。アールグレイの色した髪は閑達な彼女によく似合っている。猫の毛並みをブラッシングするような気分に和んでいたら、兼巻

君が口を挟んでくる。

「いや、だつたら何処へ消えるんだつて話」

やれやれ。私はため息を零す。

「その消えるつてのが問題だよ。夢つても、シャボン玉みたいに弾けるつてイメージがあるよね。儂いものだからだらうけど。でもそんなパソコンのゴミ箱に放り込んで一括消去しちゃえるようなデジタルな代物なのかねえ。なんと言つか……」「

顎に手をやり、私は兼巻君から田を泳がす。私の考え込む時の癖だ。

「なんと言つか、寝た子を起さないよにばずつと奥深い所へ……

埋めちゃう？ その先は知らないけれど

「埋める……」

兼巻君は声を殺して笑つた。それから私からメグへと田を移した。田も口元もより柔らく変わる。

「愛琉が君を好きなのが分かつた気がする」

柔らかな笑みがメグから私へと移る。「僕も君のことが好きだよ」そんな囁きさえ聞こえてきそうだった。私は顔を伏せた。足元から心臓へ、心臓から顔へと血が逆流したように顔が逆上せてしまつていたから。

「カール・グスタフ・コンングを知ってる？」

「心理学者の偉い先生」

それだけ。ようは知らない。

「そう、そのお偉い先生。コンングはこう言つてる。僕達の魂と呼べるものは『意識』と『無意識』に一分され、そして無意識は更に『個人的無意識』と『集合的無意識』に分けられる。君が言うスポーツってヤツは意識。で、その外は個人的無意識と呼んでいいだろうね」

「個人的無意識と集合的無意識」

「個人的無意識は無意識の中でも意識に近い層だと言われている。

抑圧から生じる意識の住み家、ようは心の吹き溜まりみたいな所だ

ね。

ビリー・ミリガンだけど、彼は幼いころ義理の父から虐待を受けた。そんな現実を抱えて生きることなんて幼い彼に出来るはずがなかつた。だから彼は自分を守る為に忌まわしい記憶を追いやつた。その追いやつた先が個人的無意識だ。記憶は表面的には現れない。けれど意識に近いから心に影響を与えてしまう。そしてビリーは解離性同一性障害を患うことになつてしまつわけ。いや、記憶を追いやつた時にはもう患つていたのかもしれないけどね。

……それと一応言つておく。解離性同一性障害は多重人格障害じゃない。それはかつての話だ。メディアはおもしろ可笑しくそればかりを切り取つて伝えているけれど、多重人格障害は解離性同一性障害の多々ある症状の中の一つに過ぎない。幻覚や幻聴、過去の虐待を擬似体験するようなフラッシュバック、睡眠障害、男性恐怖症、その他諸々の症状を抱えている。そちらの方が患者にはより辛い。

僕は『24人のビリー・ミリガン』はショッキングな話題ばかりが先行してしまつて、肝心の中身を誰も真剣に取り合つてないんじやないかつて思うんだ。フイクションであつたならそれでいいんだけど、あれは事実あつたことだ。解離性同一性障害に苦しんでる人達は今だつて大勢いる。あの本は間違つた解釈を与えてしまいかねない罪作りな本になつてしまつたんじゃないかなつて、そんな気がする

る」

半ば右から左に受け流しながら、私は「はあ」と答えた。

首を振り疲れたようため息を一つ零して、「もういいや。話を戻そう」と、兼巻君は話を続ける。

「さて、もう一方の集合的無意識についてだ。こいつは、ある人は幸せになる為のキーポイントだと言い、ある人は全ての宗教の源だと言い、ある人は遺伝子の記憶だと言い、ある人は理想郷だと言つてゐる」

「途端に胡散臭くなつたな」

「いや、まったく。實に僕好みな世界観だ」

お前の好みなんかどうだつていい。

「肝心のユング先生は何て言つてるの？」

「人間の無意識の深層に存在する個人を越えた、集団や民族、人類全体が共有する普遍的な心」

私は「さっぱり分からぬ」と首を振る。

「母親と聞いて君ならどんなイメージを浮かべる？『優しい』とか『温かい』とかそんな言葉を思い浮かべるんじゃないかな。そういう誰もが共通して持つてるイメージがある場所、それが集合的無意識だ。ちなみにそんな普遍的なイメージをアーキタイプ、元型と言つ」

「ふーん。思つたよりもなこと言つてるじゃない。どうして宇宙人がいるぞ的な胡散臭い話として受け取られてるのかな」

兼巻君は肩を竦める。

「それは僕が、八尾山も富士山も鬼越山も同じ山だって言うくらい平たく均して説明してるからなんだけね。実際ユングはとっても電波なことを言つてるから。

考へてもご覧よ。ちっぽけな人の体の何処かには宇宙にさえなぞられる程の広大無辺な世界が広がつてゐる。そしてその世界は人種も文化も時間さえも飛び越えて、全ての人と繋がつてゐる。こんなもの科学じゃない、オカルトそのものだ。人は自分の理解を超えるものに出会つたら無理にでも答えを出したくなつてしまふ。無条件に受け入れるなんて出来ないから。ましてそれが誰も立証できない壮大で神秘的なものであるなら、そこに今抱えている問題を当てはめて、身勝手な超解釈を誕生させてしまいたくなるだろうさ」「それはいわゆる現実逃避つて言つんじゃないの」

「言葉が悪いなあ。夢見がちな素敵な人だと言おうよ。事実そういう人達が世界を振り動かしてきたんだから」

天才と凡人と狂人、その差は紙一重。彼の話を聞いていると本当にそう思えてくる。私はふと下らない妄想を浮かべてしまった。夢見がちな素敵な人が溢れすぎたら、一体この社会はどうなつてしま

うんだろうと。それでもきっと、社会は何事もなく廻るのだろう。それは何処かで誰かがどんな苦労を背負い込んでいるのだから

なのか。それとも皆が皆、醒めない夢を見続けているからなのか。

兼巻君が頭を搔いて言つた。「どうも話があつちこつちに寄り道してしまった。君と話をするのは楽しいから」と。何となく照れ臭い。私は俯く。一呼吸置いて彼は話を続ける。

「個人的無意識にしても集合的無意識にしても、その名が表すとおり無意識の領域だ。無意識つてのは当たり前だけど意識を保つたまま到達出来るような所じやない。けれどアプローチは出来る」

ビリー・ミリガンを思い出し、私は「催眠術?」と兼巻君に尋ねた。彼は首を振る。

「うん、それも一つの方法だ。けれどもっと簡単な方法がある」「夢だ。

兼巻君はまじまじと私の顔を見つめそう言つた。興味深く私の反応を待つていてるようだ。彼の期待に答える理由もないけれど、私は彼に尋ねずにはられなかつた。

「当たり前だけど、結局のところその問題へと還つてゆくんだよね。ねえ、もしかしてだけど、兼巻君は私を疑つてる?」

兼巻君の顔から笑顔が消えた。

「ああ、その通り」

そのまま、兼巻君は暗がりに隠れていく。校舎の影が染み渡るよう部屋を暗く閉ざしていく。彼は立ち上がり出入口へと歩いていく。私はメグの髪を撫でながら、彼が席を外した先の窓の外を、茜色に染まりつつある空を眺めて覚悟する。部室に明かりがつき、再び彼が私の前に現れ、笑顔で私に言つた。

「その通り、だつた」

「だつた」

「そう、だつた。ついさっきまで君は僕のことを知らなかつた。僕は君の噂をかねがね聞いていた。完全無欠の完璧超人みたいな女子だつてね。でもそれだけ。お互い知らない一人だつたわけだ」

「うん」

「そんな君が僕の所へとやつてきた。君には何とも不似合いな場所だ。態々足を運んできて何を言つのかと思えば、『夢に物を持ち込む方法』なんてものを尋ねてきた。僕は思つた。参つたなつて。この女の子は夢と現実の区別がつかないのかつて。重大な精神疾患を抱えてるんじゃないのかつて。でも話してみて分かつた。その心配はないって」

少し意地の悪い気分で私は兼巻君に「本当?」と尋ねた。彼は苦笑いを浮かべ「多分」と首を竦めた。それからそう言つたことを改めるように左右に首を振つた。

「君の発想はとてもユニークだつたよ。でもそれだけじゃない。説得力がちゃんとあつた。それは君が理を持つて論じたからだ。君は夢と現実の区別がつかない女の子なんかじゃない。保障する」

「そう、良かつた」

「だからこそ気になる。どうして君がそんなことを……、いや、違う

う

兼巻君はまた首を振り、真つ直ぐに私を見つめて言つた。
「部を存続させたいから名前を貸してくれつて、君に頼み事をした
ろ。あれ訂正させてもらえないかな。僕は君が気になる。だから
正式に君をこの部に招きたい。僕には君が必要だ」

私の中の何かが乾いた音を立てた。巡る血が物凄い勢いで集中してくる。頭がのぼせる。

「いや、だから、それは、無理だよ」

ぐにぐにと、私はメグの額を指で捏ね押した。メグが不快な顔を浮かべてうーうー唸る。でも私は構わず押した。

「僕は決めた。君と僕の出会いは、意味のある偶然の一一致なんかじゃない。僕は予言する」

兼巻君は指を突きつけて言つた。

「僕が君を必要とするように、君は僕を必要とする。必ずそうなる

15・ハグロトンボの羽根、ハリネズミの孤独

私はハグロトンボの羽根を思う。

円筒の上に私は立つていて。辺りは暗い夜が何処までも続いている。白い網の目の床、出来損ないの半掛けのドームが影を作っている。ここには入り口も出口もない。

私はハグロトンボの羽根を思う。

強い風が吹いていて。白いワンピースの裾を押さえる。顔に張り付く髪を搔き分ける。私は円の真ん中に立つ。大きな赤い月を見上げる。ハリネズミの孤独を思い、吐き出す息が震える。漂う靄は銀の光放つ刃物のように滑る。それは月の光を受け、私の胸を突き刺したかのように赤い花を咲かせる。痛みはない。私にもともと痛みなんてない。

「綺麗な月だ」

真後ろに立つ彼が言う。何時の間にかそこにいる。私はそれを受け入れる。「ええ」と月を見上げたまま頷く。

「鮮血の色に似てる。酸化する前の血の色だ」

「じぽり、私の中の何かが沸き立つ。不快な気分が込み上がる。これは何だろう、私は思いながら」「ええ」と頷く。

「僕は君を探していた」

そう彼は言う。私は言う。

「私は貴方を探してたんだろうか」

そんな気もするし、まるでそんな気がしない。何もかもが鈍く、虚ろで、深い海の中を懸命に走ろうとしている感じがする。

私はまた言う。

「私は貴方の失った半身なんだろうか」

彼は言う。

「どうしてそんな悲しいことを言うの」

悲しい? どうして? 私は月に手をかざす。

「だつて私はこんなにも薄っぺらこ。今にも消えて無くなってしまいそう。もし私が貴方の半身だと言つのなら、私は貴方に還るだけ。それで全ては終わるから」

「違う。君は僕の半身なんかじゃない」

「彼は~~そいつ~~決定する。~~そいつ~~して違うのか、私には理解できない。私は尋ねる。

「私と貴方はこんなにも似ている。なのに、何処が如何違つと言つの？」

「違うよ。僕と君は決定的に違う。僕は本をよく読む。君は？」

「好きだよ。よく読むよ。ほら、同じじゃない」

「違う。僕はもっと知識を広げたいから本を読む。君は言葉の限界を超えたいためから本を読む。自分の中にある確かなイメージを少しでもリアルに表現したいから本を読む。けれど君は本を読むほどに枯れていく。この世の中にあるありとあらゆる言葉を持つとしても、君のイメージに辿り着くことはない。それを君は知っている。歯がゆく思つていてる。それでも何時か出合えると思い、君は本を読み漁る」

私は振り返る。そして彼に言つ。

「まるで予言のようじゃない、兼巻君」

「そう、その通りだよ、麻子」

兼巻君はそつと私の髪を手に取る。

「君はすっかり疲れ果ててしまつていてる。移ろい時間を機械的に見送れるほどに君はまだ年を老うてはいない。君は切り離した時間の断片の中に君を封じ込んだ。ここから出してくれと君は言つ。君は宥める。時が来れば必ず出すと。それまではここにいるのが一番の幸せなのだと」

「それが今なの？」

彼は首を振る。

「まだ。……そう聞いて君はまたひとつ老いた気分になる。内からも外からも囲まれられて、君は今にも擦り切れてしまいそう」

彼は私を哀れむ。彼は私を哀れむ。

「私はやつぱり貴方を探してなかつたんだと思つ」

「そうなのかい」

「うん」

「僕は必要ないのかい」

私は首を振る。

「そうじやないの。必要とか必要じやないとかじやないの。貴方に哀れまれてしまつたら、それを受け入れてしまつたら、私はもう一度と貴方の前に立てなくなつてしまふ。永遠に貴方の背中を追い続けることになつてしまふ。そつはなりなたくないだけ」

彼は首を竦める。首を振る。

「君は我がままで意固地で鋼のようだ。だからこそ美しい」

彼の手は髪から耳たぶへ、頬へ、唇へと伝つた。すつと彼の顔が近付く。彼の唇と私の唇の間に手を割り込ませる。尋ねる。

「貴方は誰？」

彼の手を払いのけ、私は逃れる。何処へ？ ドームの下、白い壁際へと。違う、ここには出口なんてない。

「そう、ここには出口も入り口もない。君は僕から逃れられない」

声が遠く近く木靈する。私は壁に張り付き彼を睨む。彼が一步足を踏み出す事に、私も一步横へとそれる。

「君は美しい」

声は背後から聞こえた。私の体が何かに抱きすくめられた。冷たい感触。途端に全身が粟立つ。何かは衣服を易々と乗り越え、地肌を這い回る。

「君の耳は美しいものしか見よつとしない」

彼が一步近付く。私は動けない。

「君の耳は美しいものしか聞こつとしない」

彼がまた一歩近付く。私は動けない。

「君の鼻は香しいものしか嗅いだことしない」

彼は目と鼻の先だ。私は逃れられない。

「そして君の唇は美しい言葉しか轉らない」

私の口を彼は塞ぐ。舌が絡みつく。唾液が送り込まれる。獣の臭い、強い腐臭が混じる。私は顔を背けそれから逃れる。したたかに吐く。彼は兼巻君じゃない。兼巻君じゃない。

「君は本当に我がままだ。僕を求めておきながら、僕をいらないと言つ

「私は何も求めてなんかない」

乱暴に彼は私の髪を掴む。強く、巻り取るように掴む。私は悲鳴を上げる。

「君は導いてくれる者を求めた。君を慰めてくれる者を求めた。君は何時だって誰かに何かをしてもらいたい。誰かに何かをしてやることなんて考えられない。だから君は求めたんだろう。そんな自分を滅茶苦茶に壊してくれる者を」

彼は私の頭を壁に叩き付ける。言つ。

「幸いにして僕は男で君は女だ。何度でも何度も、僕は君に注ぎ込んであげる。何度でも何度も君を穢してあげる。何度でも何度も粉々になるまで擂り潰してあげる」

彼は冷ややかに笑う。死刑を宣告する。

「虚ろに、白痴に、在るがままを受け入れろ」

私はハリネズミの孤独を思つ。

私はハリネズミの孤独を思つ。

ハリネズミの孤独を思い、ハリネズミの孤独を背中に宿す。体を這い回る何かに針が突き刺さる。酷い悲鳴が木靈する。私は彼の手から逃れ、真っ直ぐに走る。転落防止の柵へと真っ直ぐに走る。

高く足を跳ね上げた瞬間、暗闇に身を委ねる恐怖が私を包んだ。けれど私はハグロトンボの羽根を思う。ハグロトンボの羽根を背中に宿す。何処までも私は飛んでいける。あの赤い月にさえ手が届く。地面を蹴り、柵を蹴り、私は暗闇に身を投げ出した。

「おめでとう」

投げ出す間際に、私は柵に立つ彼を見た。彼は笑顔で拍手をしてそう贅辞を送った。それから、不吉な言葉を残した。

「また会おう、麻子くん。次に会つ時は、一度と醒めない悪夢を君にプレゼントしてあげる」

暗闇に包み込まれるように、私と私の体は四散し、消えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3338d/>

バク（休止中）

2010年10月12日13時57分発行